

東北薬科大学 一般教育関係論集 9号 別刷 (1995)

ドロース伯爵夫人
の
貧と富と罪と贖い

貧しい貴族の娘達の談話に供する
教訓的実話

第 二 部
(第一章～第七章)

富

ルートヴィヒ・アヒム・フォン・アルニム
著

山下 剛・林 雄作
訳

【翻訳】

ドロース伯爵夫人
の
貧と富と罪と贖い

貧しい貴族の娘達の談話に供する
教訓的実話

第二部
(第一章～第七章)

富

ルートヴィヒ・アヒム・フォン・アルニム
著

山下 剛・林 雄作
訳

第一部「貧」梗概

今は廃屋同然の城と邸宅にはかつて侯爵とP...伯爵が住んでいたが、対抗心に駆られて年来の友情を失い両家も不和になる。伯爵家は当主の贅沢三昧のために没落し、奔放で軽率な伯爵令嬢ドローレスと冷静で聡明な姉クレーリアは父の失踪と母の死の不幸に見舞われる。娘達は男子相続の法により遺産相続ができず立ち退きを命じられるが、折から勃発した戦争を幸いに今までの住居に隠れ住む。異国の兵士の侵入をかわしつつ忠義な老執事に助けられて耐乏生活を送るうち、遊び好きの妹は誰とでもいいから結婚したいと言い、姉はこれをたしなめて貴族の誇りを守るようにと諭す。そんなある日、カール伯爵なる旅の学生が二人に会いたがっていると伝えられると、ドローレスは密かに姉への嫉妬と自信を感じる。ドローレスは訪問した伯爵を迎え、貧窮を取り繕ってクレーリアを侍女と紹介し、結局は伯爵を姉から遠ざけて独り占めにする。伯爵はすぐにドローレスと婚約し、クレーリアとも友情を結んで楽しい時を過ごす。内緒で二人に財政援助を続けたために旅費が底をついてしまう。泣く泣く二人と別れたカールは大学に戻り、二人の手紙に感激しつつ春を待って再び彼女達を訪れる。

『ドローレス伯爵夫人』全体の章立て

第一部	「貧」	全9章（11～47ページ）
第二部	「富」	全31章（48～235ページ）
第三部	「罪」	全13章（236～306ページ）
第四部	「贖い」	全16章（307～513ページ）

（各部のページ数は、ハンザー版アルニム全集の第一巻 „Armut, Reichtum, Schuld und Buße der Gräfin Dolores“ In: Achim von Arnim. Sämtliche Romane und Erzählungen (in drei Bänden). Erster Band. Hrsg. von Walther Migge. 2. Auflage. München: Carl Hanser Verlag 1974. S. 11-513 に従って付した。）

目 次

ドロレス伯爵夫人の貧と富と罪と贖い

第 二 部

富

第 一 章	カール伯爵不在中の二人の伯爵令嬢の物語。 クレーリア、シチリアへ旅立つ……………	56
第 二 章	カール伯爵、ドロレス伯爵令嬢の許へ帰る。不満と諍い…………	60
第 三 章	二人の和解と結婚……………	77
第 四 章	伯爵夫妻、田舎へ旅立つ。醜い男爵と気違いイルゼ…………	79
第 五 章	商業顧問官ヌーデルフーバーと公子教育係キレ……………	89
第 六 章	失われた世継ぎの公子……………	91
第 七 章	失われた世継ぎの王女ヴェンダの物語……………	99

第 二 部 富

第 一 章

カール伯爵不在中の二人の伯爵令嬢の物語。 クレーリア、シチリアへ旅立つ

我らが二人の貧しい伯爵令嬢の城と日頃の暮らしぶりは、気前のいい伯爵のおかげで、この冬の間は目立って快適で見事なものになっていた。何しろ伯爵は二人に、ご存知のように、宿の主人を通して仕送りの全部を送り、急場に必要額しか手許に残さなかったのだから。控え目なクレーリアの懇願も聞かずに、ドローレスは一番良い階の二三の部屋を整えた。ちょうど競りに出された侯爵の城の古風な家具を使ってできる限り金をかけずにやったのだが、再び客を迎えるには十分礼儀にかなっていた。ドローレスは伯爵と付き合い始めてこの六週間というものが明るくなり、人付き合いがしたくてたまらなかった。ドローレスが町に住む貴族達と旧交を取り戻すと、子供の頃すでに彼女が心を寄せていた若い男達の多くが、本当に美しく成長しているのがわかった。これらの男達をドローレスは避けたくなかったし、彼女の信奉者達も拒否されることはなかった。それやこれやで部屋が思いがけず超満員になることもたびたびだった。しかしこれら全ての骨折りの美しい中心はドローレスだった。クレーリアも確かに美しいと言ってよかったが、彼女は見た目がいかにも生真面目だったので、この大きな群れの要求を受け入れなかったのだ。中身のない追従や座談のつまらない言辭を弄して敢て彼女に近づこうという者はいなかった。そのためにクレーリアは多くの者達から冷たすぎる、お高くとまっている、社交性がないなどと思われた。ドローレスは奇妙なことをあれこれどぎつくやらかしては悦に入っていた。おしとやかで行儀がいいことを良しとする世間一般の

良識に楯突いたとき、彼女は胸がすつとするのだった。男達もその種の少女にまさる彼女の長所を知っていた。彼女も男達のずっとひどい奇妙な行状を大目に見なければならなかった。敬虔なクレーリアにはどちらも苦々しいことだった。そうなのだ。これら様々な人達を抑えるために、もしも自分の存在が妹のためにならなかつたとすれば、クレーリアはおそらくこのような人付き合いなど完全に避けたことだろう。こういった付き合いがドローレス伯爵令嬢に与えた様々な新しい印象は、彼女の頭をいっぱいにしていて考えからますます伯爵を押し退けていった。だが、彼女の手紙はそのような気配を微塵も感じさせなかった。ペンはドローレスを知らず知らずのうちに繰り返し繰り返し昔の世界に連れ戻したし、それを思い出させるものは伯爵にも全てすばらしいものだったのだから。彼女の心は、触れ方一つで全く明るく大きな音で鳴り響いた。しかし、この鐘の余韻が消えないうちにハンマーが次の音を叩き出し、前の音と混じり合ってしまった。伯爵が彼女の中に呼び覚めた優しさが、今や愛すべきどの男のそばにいるときにも不意に彼女を襲うのだった。さてこうなると、確かに彼女はわざわざ口にする必要がないほど彼と結び付いていると感じた。しかし、我々の時代の若者達は目と目だけで理解し合うものだから、少なくとも彼女は彼らに誤った期待を抱かせることになったのだ。すると伯爵の姿は徐々に消えて行き、ドローレスは彼のことを思い出すために、自分が描いた戯画を探し出さなければならないほどだった。美しく敬虔な魂とは聖ヴェロニカの布^{*1}のようなものだ。そこには恋人の姿が、絵描きのように上手ではないが、永遠の誠実さそのままに写し取られている。全ては彼女にとって純粋な思い出なのだ。それは美化されてはいない。なぜなら彼にはそれが不要ないからだ。醜くもされていない。なぜなら彼女にはそれが我慢できないからだ。これに対し軽々しい俗世の魂は一枚の鏡として現れる。それは確かに身近にあるもの全て、美しく醜いものを、そっくりそこから取り出されたようにありのままに捉えるけれども、しかし目に見えるものしかその魂には触れないのだ。狭い山並みの向

こう側にもう、その魂がつかなぎ止めることのできない彼方がある。そして過ぎ去ったことを全て呑み込むように大洪水がこちらへやって来る。ドロースは人々に囲まれて伯爵のことなど何日も忘れていたのに、クレリアは何と誠実に伯爵との友情を保ったことか。また伯爵も、男女の間に本物の友情など決して見られないという母の意見を忘れずに、何と愚かにあの温かい友情の言葉の数々を忌まわしい愛であると解していたことか。それはどうにも始末に負えない愛で、彼はそれと戦わねばならないと思った。物質的な利益とか健康のために考えてというよりも、ひょっとしてこれらの冷淡な手紙で彼女は心を動かしたのかも知れなかった。そしてとうとうクレリアは、妹と伯爵から長いこと別れることになってしまうある提案を受け入れることにした。伯母の一人に、シチリアに駐在するスイスの陸軍大佐夫人がいて、夫からすぐにも当地へ旅立つようと言われていた。実の子供は死んでしまったので、夫は貧しい親戚の幾人かと親しくなり、自分の家に引き取りたいと思っていたのだ。大した財産を残してやれないまでも、豊かな収入と快適な家を共にする喜びを贈ることができるから、というのだ。伯母はこの二人の伯爵令嬢に、あの遠く離れたもっとすばらしい気候の中で幸福を探してみないか、と言ってきた。ご承知の通り、なぜクレリアがこの提案を受け入れる気になったのかと言えば、両親の辛い思い出と、他人の施しを受けて生活するという堪え難さのせいだった。だが、ドロースがあとさきも考えず自分も一緒に旅に出ると宣言した時、クレリアは何と驚いたことだろう。ドロースは、この企ての物珍しさに刺激されて、多くの人と語り、多くの人が自分のことを語るだろう、と言った。青い空、音楽、カーニバル、果ては様々な芸術の記念碑まで持ち出して、自分はそれで絵の才能を磨きたいとまで言った。祝祭の国そのもの、イタリアという名前をめぐって幾千もの描写がなされた国。これら全てがドロースの前をざわめきながら通り過ぎて行った。そして姉は理性的に考えて、近々恋人となされる有利な結婚を単なる好奇心から破談にするべきではないと言ったが、それだけ

では妹に旅を諦めさせることはできなかった。大佐夫人はこの事情を聞くと、自分の馬車に彼女を同乗させるのをきっぱりと断らざるを得なかった。結末を知っている我々としては、ドローレスが自分自身の本性の合図に従っていたらよかったと思う。憧れと気まぐれという点では相矛盾し、罰せられずにいることが稀なあの本性に。それというのも、彼女の欲することを知っているのは彼女だけだが、我々の方は我々の知らないことを知りたいからなのだ。

クレーリアは心も重く父の家から旅に出た。ドローレスは姉の戒めを聞こうとしなかった。姉は妹に遺言状を書き残した。ドローレスは確かに姉の運命に気もそぞろになり、涙しながらこれを通読したが、何一つ言い付けを守らなかった。思い出をたどったり、将来の生活にはおよそふさわしくない付き合いをことごとく諦めたりするどころか、この場に欠けているイタリアの空気を全て埋め合わせようとした。姉と同じ自尊心からいつもははねつけていた町の舞踏会が、彼女にとって無くてはならないものになったのだ。彼女は美しさで輝き出ると同じように、衣装でも際立ちたかった。こんな様子で彼女は伯爵が切りつめて残し、大佐夫人が彼女に贈呈したものを瞬く間に浪費してしまった。乗馬の趣味も戻ってきた。女性がこんなことをするのを伯爵がどんなに嫌っているか、彼女は知っていた。伯爵はそんな態度に世間に対する特別の反抗を感じたのだ。ドイツの田舎町では、世間は馬に乗る女達の後ろ姿に嘲笑を浴びせ、小さな事故でも起こそうものなら、それを繰り返し語り、事実以上に言い触らすのが普通なのである。もちろん彼女は伯爵にそういったことは何も書かなかった。伯爵との親密な逢瀬への憧れが戻ってくると、彼女は誰でもうんざりするような孤独の時を探し、天の花嫁のように切なげにそして甘えて伯爵に手紙を書いた。それは意図的な偽りでは全くなかった。彼女はしかしそのために別の時間を見つけることは実際できなかっただろう。彼女はその時間には真剣だったのだ。純粋な心情と偉大な才能を区別するのはただ一つ、神の世界のように多彩な全存在の統一である。卑小な心は、最高の人間の仕事に似て予

盾し合う部分から組み立てられており、その多くの部分は見事なものかも知れない。しかし、それは連関から裂き取られない限り、すっかり評価されることはないのだ。

第二章

カール伯爵，ドローレス伯爵令嬢の許へ帰る。不満と諍い

ついに復活祭の休暇が来て、我らが親愛なる伯爵は花嫁の許に旅をするたっぷり時間を得た。彼はそれまで戸口の暦に線を引き一日一日を消していたのだった。あらかじめ全ての荷造りを終え、片づけものをし、暇乞いをしていった。彼は聖地へ向かう巡礼のように一人きりで、敬虔で純粋な思いに没り、以前と同じ、日に焼けて色のさめた緑の軽騎兵の軍服を着て、振り返らず、ただ黙々と、巡礼行の気高い目標に向かって急ぎ足に山や谷を越えて行った。目的地に近づくと彼の胸はますます高鳴った。そして、令嬢達が亜麻布を洗っているところを初めて覗き見た岩山の上に再び腰を下ろした。その柔らかい座り心地は、長い追放の後に王がどっしりとした空の玉座からに再び就いたときにもまさるものだった。^{*2} 太陽が夕日となって彼の真向かいにあった。それが彼の目をくらまし、朝の太陽ではほとんどできない花の世界を出現させた。彼はやっと亜麻布がかつて彼の目をくらました所を見下ろすことができた。目をこすって見ると、実にたくさんのちかちかする火花が目の前に現れた。とうとう彼にはドローレスの姿がわかった。彼女は目隠しをして多くの若い男女に混じって鬼ごっこをしていたのだ。この子供の遊びほど無邪気なものがほかにあつたらうか。だが、それは彼の知っている彼女の姿ではなかったし、彼女が手紙に書いてきた彼女自身やその気分や暮らしふりとあまりにも違っていた。彼女は厚かましくも自分を高貴で神聖であると書いていたが、こうなると彼女は一瞬ご

とにそれを否定しないわけにはいかなかった。手紙は彼女の影絵などではなく、輝く抜け殻だったのだ。ときおり彼女はそれを抜け出して、彼女の本性の中でますますしなやかに動き回りがったのである。伯爵は、それまでに感じたことがないほどの憤懣やるかたない思いでその全てを見た。何ともいまいました。彼女は長いこと逃げ回っていた一人の若者を捕まえると、急いで目隠しをはずして正体を見破った。伯爵は罵りの声を上げた。今度は若者が彼女の前にひざまずき、彼女が彼に目隠しをした。それから彼女はその前で実にあでやかな手つきで、彼の目が見えるかどうか試していたが、とうとう若者は彼女の片手をつかんで接吻をした。男は平然としてすっと立ち上がり、さっきと同じ遊びが始まった。伯爵は、自分ならこのような恩寵に対しどんなにか感謝しただろうと考えながら、すっかり夢想に耽ってしまい、まもなく彼の好意は嫉妬を打ち負かしてしまった。今度は彼女がまた捕まり、目隠しをされた。伯爵は彼女の軽やかな身のこなしを楽しんだ。彼ができるだけ塀際に近寄ると、彼女はすっかり夢中になって一目散にその方に追いかけて来たので、風の流のため上品な白いドレスがびったりと体にまとわりつき、彼がそれまで見たことがないほどはっきりと彼女の美しい体の輪郭全体があらわになって、彼の方に向かって来た。何とこの上もなく美しい均整に溢れていたことだろう。今や彼はもう自分を抑え切れず、塀を跳び越えると、走り回っている大勢の人々の仲間に加わった。このような大人数では、飛び入りで仲間が増えるのは怪しむに足りないことだったのである。

伯爵がわざとへまをしたので、ドローレスは彼を捕まえた。息遣いも荒く目隠しをはずして恋人の姿を目にした時、彼女の驚きはいかばかりであったろう。しかし、残念ながら彼は何と変わり果てていたことか。つましく引きこもってひどく勤勉に暮らしていたので、彼が初めに姿を現した時の潑刺さがなくなってしまったのだろう。その上、胸に秘めた愛と、至福の想いで夢見つつ彼女のことを考えながら、しばしば寝ころんだ太陽の光で彼は日に焼けていた。しか

し、彼女から見ると、むしろ色褪せた服や汚れたシャツが彼の風貌を変えていたのだ。彼女がその間に知り合った多くの美しく背も高い男達、その中には今彼を取り巻いて好奇の目で見ている者もいたが、その男達に比べるととりわけそう見えるのだった。あの頃は孤独だったから彼が一番美しく見えたのだ、と彼女は新しく知り合った人には誰にでもそう言っていた。あの頃は誰も止める人がいなかったの、彼女はあとさきを考えず彼にあらゆる愛撫を許したが、今ならその大変な親密さは容易に社交界の娘達の陰口の種になっていたことだろう。逐一はつきりとそう考えたわけではないが、それら全てが彼女の心に響いたのだ。彼女は初めこそ彼の姿を見て歓声を上げたが、すぐに奇妙な沈黙が続いた。伯爵は彼女に接吻しようとし、彼女もちょっと口を差し出した。すると彼女はその口をまた引っ込めた。確かに接吻はできたが、それは封蠟がもう冷えてしまったところに印章を押すようなものだった。要するに、彼は彼女との再会第一声で期待していた歓喜を得られなかったのだ。それで彼は考え込んでしまった。こうなると彼女に言おうと前もって考えていたたくさんの言葉の代わりに、心をこめた挨拶にしてはつまらない言葉がやっと浮かんできただけだった。陽気な気性のドロレスは、埋め合わせにその場を取り繕おうとした。皆をからかい、彼をからかうことで、彼女は新しく身に付けた社交術を恋人の前で華麗に繰り広げてみせたが、この年齢の娘の場合には男性よりもありがたいことで、それは次第に一種とめどないおしゃべりに変わっていった。それは彼女の虚栄心がさせた悪しき悪戯だった。伯爵には何の意味も趣向もない身の毛のよだつ叫びとしか思えなかった。困惑を困惑で覆い隠す馬鹿げた上に厚かましい所業であり、聞き苦しく、空疎で、非難めいたものだった。この中では誰しも皆それにしかるべき場所があるのに、伯爵だけが高い志と生真面目さのせいで、この場の気分と合わず、自分の場所を見つけれないでいるように思えた。 — すると、善良なクレーリアのいないことが彼には倍も苦痛に感じられ、彼女ならばきっとこの絵のけばけばしい色彩の全てに穏やかな影を

付けてくれたろうにと思った。彼はほんの一時でもドローレスと二人きりになりたかったが、彼女はその機会をくれなかった。客達も、彼に悪いから帰ろう、と言出す者がいなかったので、彼は長旅の疲れを口実に、彼女のためを思ってその場を離れた。ドローレスはそれを真に受けて、彼の不機嫌には少しも気づかなかった。彼女は皆が彼のことを何と言うだろうと聞き耳を立て、皆に向かって彼をとんとんと褒め上げた。すると、その中の一人がこっそりと彼女にお追従混じりにこんなことを言った。「貴女が他の人より美しいからか、それとも善良だからなのか、私にはわかりません。しかし、貴女が精神があらゆることをやり抜き、寡黙な人々をも才気煥発にすることは存じております。はっきりおっしゃってください、貴女ご自身が盲目だなんてことはございませんよね。」

— 彼女は微笑み、話はこれきりになった。一同が解散すると帰り際に一人の男がもう一人にこう言った。「残念だね。あの美しい娘に金があれば、あんな野暮天の伯爵なんかと結婚せずに済むものを。彼女があつた男を愛するなんてあり得ないことさ。僕には彼女の様子でそれがはっきりわかるんだ。」 — 「それなら、僕らのような若い者には絶好の機会というわけだ。」と年のいった独身者がふざけて言った。

カール伯爵は一同が自分のそばを過ぎて通りをくだって行くのを見た。伯爵は令嬢の近くに部屋を借りておいたのだ。彼はさいころでも振るように、目まぐるしくあれこれと考へた。自分のしたことが何がしかになろうが、何にもなるまいが、彼にはどうでもよかった。そんなことを考へているうちに、次のような詩がその時自分の手で日記に書き込まれていた。

窓辺に立っても、
何も見えてこない、
そこへ多くの亡霊が現れた、
僕の愛しい人を変えてしまった奴らが。

才氣溢れる男達は、
ひどく懇ろに愛しい人と話したので、
とうとうまだ心の中に眠っているものまで、
奴らには全てお見通しになった。

それを奴らが目覚めさせたのだ、
まだすっかり目の覚めないうちに、
そして一緒になってからかった、
月光が太陽を浴びているかのように、
彼女は魂を取り替えられてしまった、
かつてはあれほど愛らしかったのに。
今や彼女の叫びがこの耳にざわめくと、
とても悲しくなってしまうのだ。

敬虔な気持で彼女と別れた後、
慰めもなく僕は町へ行った、
彼女はその時密かに楽しんでいたのだろうか、
僕は彼女に指輪の大きさを計ってやらねばならなかった。
町では長いこと待たされたが
とうとう彼女に合う指輪を見つけた、
上品でほっそりとしたかの人に、
それは彼女の手にあった。

そこで僕は友人達に出会ったが、
誰にも言いはしなかった、
なぜ僕の頬に

嬉し涙が流れたのかを。
またここでは誰にも言いたくない、
なぜ今僕が悲しみ押し黙っているのかを、
言葉という言葉が出ないのだから、
全てがかくも愚かしく行われているところでは。

戻って来てみたら、
大勢が御馳走を前に座っていたのだ、^{*3}
彼女がこいつらを引き入れたので、
家の中に僕の居場所は残っていなかったのだ。
鉢も皿もなく、
彼女は僕に最上のものを出してはくれたが、
連中の方がずっと素早かった、
この紳士方は自分のことしか考えなかったのだ。

奴らは招かれもせずにやって来て、
皆が彼女を褒めちぎった、
それは本当に彼女の評判をさらに落とすはずだ、
こんなに出すぎたまねをすると。
彼女はその一人の男をぶった、
男は全くそのわけを知らなかった。
もう一人の男を彼女は大事に扱った、
僕は驚いて口もきけずに座っていた。

その時その一人が僕からだまし取ったのだ、
全くこっそりと僕の指輪を、

それを一本のリボンにくくり付けると
それは円を描いて回った。
僕はお祈りすることも歌うこともできるが、
何のためかわからない、
怒りのあまり飛び上がりたいほどだ、
これが冗談だとしても。

どうしてこのままで他人のことまで考えられよう、
正気ではいられない、
ここを立ち去り旅に出て、
何千里も歩く方がよほどました。
何千里かそれ以上
海を渡り海に入れば、
そこには天の梯があるのだ、
ああ天に昇ることができたらいいのに。

こう書き終わるが早いかどっと疲れが襲ってきた。彼は服を着たまま、開いた窓際の肘かけ椅子に身を投げ、人間が目がくらむことなく身を支えることができる天の梯の初めの数段に足を掛けた。潑刺たる青春は希望に溢れ、青い花でいっぱい春のようで、毎朝毎朝が、夕べにしぼんでもはやその場所すらわからない花の代わりに新たな花を目覚めさせ、数多くの蕾がなお今か今かと花開くのを待っているのである。美しい夢からさらに美しい生へと彼を目覚めさせた朝、若者の怒りは、開け放たれた窓辺で露がいっぱい降りた胸から、太陽に照らされてまもなく露とともに消えていた。風が城の庭から部屋いっぱいに花を運んで来た。庭が木立の列で区切られた土地は、どの枝にもなじみがあり、それはかつての歓声を響かせていた。彼は、楽しみにしていた初めての喜

びを台無しにした自分の猜疑心を、愚かしいこと、病気だと叱り、下に降りて、水音高く流れる川で体を洗い、すっかり体を冷やそうとした。彼がこうして川の流れに足をすくわれないようにしていると、遠目に伯爵の城の一つの窓が開くのが見えた。それはドローレスで、茂みの間からその姿がよく見えたが、彼女の方からは彼がわからなかった。彼はタントロス^{*4}のように彼女に向かって手をいっぱい差し伸べ、至福の確信を抱いてこう考えた。お前には僕の姿が見えない、野のうちで最も美しい林檎よ。僕の手はお前に届かないが、お前は僕のもの、まもなく僕のものになり、そうしたらお前のそばにいよう。僕のそばにある榛の木や野薔薇もお前に腕を差し伸べているが、僕はそんなものでなくてよかった。山と谷を越え空と海を渡って、まもなくお前のそばに行く。そうしたら僕の手がお前に届くのだから。 — 人間は人間であることを喜ぶものだが、我々はそれに薄笑いを浮かべるようなことはすまい。多くの人々がそれを呪い、はねつけているのだから。 — 彼は赤と白の縞の入ったチョッキと夏の長ズボン^{*5}を着け、緑色のふわりとした布地の丸味のついた上着を着て、ござっぱりとした身なりをした。この姿で令嬢の部屋に入って行くと、昨日の豪華さとは裏腹に、彼女は粗末で擦り切れたサンペーヌ^{*6}と呼ばれる安い生地で作った朝の部屋着で彼を迎えた。だが、彼女の愛想の良さと人なつこさはすっかりもとに戻っていた。彼女はひどく昂揚して社交仲間の大部分を嘲ったが、社交は姉がいないほんの気晴らしのつもりなのだと言った。伯爵はそこで彼女が好奇心をそそられて見ていた包を開けた。上の方には、彼が母親の相続財産から彼女に贈った婚約指輪があった。十二使徒がそれぞれの印で刻まれ、半浮き彫りの銀細工の中で輪を形作っていた。その輪の中で後光に包まれた黄金のキリスト^{*7}が気高く輝き、両手に酒杯とパンを持っていた。全てが非常に見事な細工だったが、もちろん最新の様式というわけにはいかなかった。彼は、それまで手に入れた物のうちで一番気に入った贈り物として、彼女にそれを手渡した。彼女は、彼に対する好意からさもそれが気に入ったようなふりをしたが、こんなも

のを嵌めて社交の集まりになど出られたものではないと思って腹を立てていた。しかし彼女はそれを嵌め、自分のものにした。すると今度は、彼が旅の途中のとある修道院で大喜びで買い求めた、尼僧の細工になる実にきれいな品々をずらりと並べ、彼女に渡した。その中には、紙に穴を空けて見事に描いた聖人の絵やら、小さな象牙の聖櫃やら、絹の端切れで作ったマリア像やら、お清めをしたロザリオ^{※8}やら、無邪気で小綺麗な教会らしい豪華な品々が山のようにあった。彼女は礼儀を失しないようにこれにも喜んでみせねばならなかったが、本当はこれよりはるかに好ましい物、様々な種類の装身具などを期待していたのだった。実際、彼女はこれらに敬虔な気持も持てず、手にする気にもならなかったので、この結構な小間物の数々をどうしていいかわからなかった。彼女は彼が血道を上げてこんながらくたを集めてくることに満足できなかった。だが、こう不満を漏らされただけで彼はもう不愉快だった。彼は当然ながらこの熱心さを大事に考えており、こうしたからこそつまらぬ素材に血を通わせることができたのだと思っていたからである。ドローレスはしかし、町で定期的に開かれる催し物に出かけたこのひと冬の間、自分自身とわずかのきっかけをよりどころにする内面の喜びについて、多くのことを忘れてしまっていた。こうなるとピアノの伴奏くらいではもはやダンスはできなかつただろう。彼女を刺激するには、彼女に注意を向けている相手が少なくとも十人は必要で、彼女の全然知らない、彼女が気を惹きたい人間が少なくとも一人はいなければならなかった。間違っても快樂あるいは苦しみに踏み込まぬよう、常に自分に気を付けている社交の集まりを毎日ほどほどに行うことは、何と信じられないほど効用のあるものであろうか。だが、それが昂じて我が身を引き渡してしまうほどの歓喜になり、そんな状態にある若い娘達を見たら、我々はハムレットの台詞をもじってこう言ってやりたいものだ。「尼寺へ行くがいい — 遊び場になぞ行かずに。」と。わずか数週間しか町にいられない田舎の娘達は、休暇ももらった兵隊が引き続き勤務についている仲間の前で見せるように、非常に活発など

ころを見せるというだけでも我々には魅力があるのだ。また、たいていの人間は非常に成り立ちの異なった国々を旅行することによってある種の詩的な性格を得るが、その理由は、多くの関係が無価値であることが彼らにとって否定の余地もなく明白になってしまうというだけのことである。すると彼ら自身の祖国が、かつては見逃していたり軽蔑していたりした多くのことで、彼らを驚かすことになる。ここでは、この観察をあの小綺麗な小間物の数々に対して行い、それらへの弔辞としよう。伯爵はそれらを贈り物にと持参したのだが、それから数日後にドローレスのところに行くと、聖人には口髭が描かれ、付けばくろが付けられているという見るも無残なありさまで、この仕事に一段落つけた彼女がどうにも笑いが止まらないでいるところだった。それらに対する彼女の無関心のために彼は気分を害していたが、さすがにこの狼藉には我慢がならなかった。彼は大変な怒りに駆られてその全てを引きちぎり、窓から捨ててしまった。彼女はさらに大笑いし、ふざけ半分にロザリオで彼をぶった。「君の中の悪魔が笑い出したんだろうよ。」とついに彼は言った。黙っていたら彼の心臓は飛び出していたことだろう。彼は部屋を飛び出して家に帰った。彼は腰を下ろし、じきに罰を受けるというので自首して出る犯罪者のように、自分が何をしたのかをよくよく考えてみた。しかし、真実の神聖さが突然彼の心にひらめいた。彼は自分自身の至上の幸福を得るためであれ、間違っても嘘をついたり、お追従を言ったりしたくはなかった。彼は自分の正しさを感じ、それをわかりやすい寓話の形で彼女にはっきりと示そうとした。そのために彼は手紙を書き、次のような短い物語を添えて彼女に送った。

荒野の乙女

天空と大地の息子が
 救世主誕生の日の夕焼けの中から、
 家畜の群れの許に一人の美しい子供の姿を見つけた、

だが誰も贈り物をする者はいなかった。

信仰はまだ沁^{しみ}渡っていなかったのだ
後に創造されたこの草地には、
そこはすっかり岩に覆われ、
太陽はほとんど射し込むことができなかったからだ。

だがその小さな娘は、
新たに岩陰から射し込む光を喜び、
その上とても愛らしい顔立ちで、
高貴な血がその両の頬を彩っている。

娘は光の中で愛苦しく跳びはね、
緑が彼女の目にととも滑らかに柔らかく映ったので、
優しい^{こぼれ}裾に合わせて歌わずにはいられない。
主は彼女を信仰に導くおつもりなのだ。

主は幾筋もの光で
遠い岩の上へと娘のために山羊どもを追い立て、
娘は注意深く山羊の方へよじ登り、
主は輝く明るさの中で道をお示しになる。

思い切って苔に覆われた平地の彼方に行こうと、
娘はもう一つの土地を見ると、
驚きのあまり心が萎えそうになる、
目の前で全てが燃え上がり輝いているのだから。

そこには幾千もの小さな食卓があり
周りは色とりどりの蠟燭が立てられ、
パンと葡萄酒が所狭しと並べられ、
美しい法衣が食卓を覆っている。

人形の代わりに聖人の像が、
この楽園に住いをなし、
子供達が柔和にさらに穏やかに歩いて行き
この楽園が造りなしたすばらしさを見ている。

娘はそれを見て、誰も止めようとしなないものは、
自分のものだと思う、
だがまもなく多くの少年が姿を現わし、
へりくだり静かにそれをくれるように頼む。

少年の一人が娘の手に接吻しようとし、
娘はその顔に林檎を投げつける。
少年が上手に言葉で娘に挨拶しようとする、
娘は少年の口に蠟燭を押し込む。

ところがもう一人の少年が頓智比べに来たので、
娘は聖人の像を全て取り出し、
道化の衣装を着せ始め、
そして賭で手ひどく失ってしまう。

幾千という天使が種蒔いたものを、

子供は無分別から台無しにし、
多くの敬虔な子供が祈り求める
主の贈り物も、娘にはがらくたにすぎない。

すると主が娘のところに歩いて来られた。
哀れな小さな子供に姿を変えて、
そして娘がはねつけ無駄に費やしたものを、
どうしても欲しいと言う。

すると娘は豪勢な食卓が空っぽなのに気づき、
蠟燭も消えかかっていた、
杯の木の茂みはすでに霞んでしまい——
見えたのは、娘の知らないものばかり。

それは金色の、
^{から}空の胡桃の飾りが付いた鞭、
それを無邪気にも娘は小さな子供の姿をした
主に与える。この方にはふさわしくないのに。

主は金の鞭を手に取り、
か つ て の 姿をお見せになる、
鞭打たれて、赤い血から
地上に赤い薔薇が咲く様を。

弱々しくうなだれ、頭を支えきれず、
苦痛に満ちて目を伏せ、

主は言われる。「お前も私を打とうとするのだな、
これほどたくさん贈り物をしてやったのに。」

自分がはねつけ足蹴にしたものを、
娘は違った目で見ると、
様々な品々に現れた主の贈り物が
まさに深い意図の中に現れている。

葡萄酒の中、パンの中に主の思い出があり
主の母君の聖なる姿がある、
娘は目を伏せずにはいられず、
そこにある多くの聖人像も娘を叱る。

娘は周りの足元に
自分が踏み壊した主の精巧な作品を眺め、
遊びには夢中でも真剣な忠告には、
従わなければならなかったのだと思う。

柘の木で編んだものは教会だった、
滑らかな岩は祭壇だった、
だが今や山々は荒涼としており、
その上教会は焼け落ちている。

子供は贈り物に手を伸ばし
初めははねつけたものを拾い集めようとする。――
そこで子供は目が覚めて不安に駆られて見ると

我が身は寒く厳しい雪にすっかり降り込められている。

夜は明けても、おぼろなまま、

寒さが恐ろしい声音で言う。

お前が粗末にしたものこそ真理、

お前が賭で失くしたものこそ光なのだ、と。

この寓意的な詩は令嬢にそのまま伝えられたが、彼女にはその一言半句もわからなかった。逆から読んで理解できなかった。何しろ、彼女は上演しようとしていた喜劇のことで頭がいっぱいで、小さな聖人の像の一件はほとんどすっかり忘れていたのである。詩について言えば、そも特徴的なことだが、多くの若い女性ははっきりと線でも引かれたようにある種の理解からすっかり隔られている。とりわけ、彼女達の本質と本性に近く、その意味からして彼女達には喜ばしいものとなるあらゆる事柄について全くそうなのである。これとは逆に、お追従はどんなに誇張された曖昧極まるがさつな言葉でも彼女達にはわかるし、知り合いへの悪口も同様である。たいていの場合、彼女達が本当に生真面目が上にも生真面目なものや、呆れ返るほどの冗談を避けるのは、両方とも彼女達の普通の生活の表面に塗られた白粉おしろいを突き破ってしまうからである。長いこと読んでから彼女はとうとう、自分が子供の姿に描かれているので、伯爵は自分自身を主イエスになぞらえているのだとわかった。どんな文学にも、たとえそれが出来事と関係があっても、独自の価値を持つ部分があるということが彼女には全く思い及ばなかったのだ。彼女は全部を笑い飛ばすと、それをそのままにしておいた。彼女は伯爵を待ち受けて文句を言おうとしたが、彼は返事をもらえなかったのでやって来なかった。彼女はじりじりして待っていたが、ついに腹を立てた。彼のせいで、一緒に行くはずだった社交の集まりにも欠席することになった。とうとう彼女は町の料理屋で働くあはずれの女中が言っ

た雑多な話を思い出した。女中は今では見られなくなった老従者ループレヒト^{*9}の話をして、散々男達の暴君ぶりを語り、男をどう教育しなければならないかを彼女に吹き込んでいたのだ。彼女はじきに我が身の不幸を哀れと感じ、自分をこんな酷薄な男に結び付けた運命を思っ涙を流した。結局彼女はすっかり物語の主人公気取りだった。婚約したばかりで、もうこんな辛いことがあるのだから、結婚したらどんなことになるかしら。気丈なところを見せてやるわ。言いなりになんかなるもんですか、と言った。こうして高慢な強情さ、愚かしい自信が募り、結局そのせいで彼女は破滅することになるのだった。ところで伯爵は自分を侮辱した女性よりもはるかに不幸だった。言葉が過ぎた、としばしば思った。彼は常に彼女からの知らせを待っていた。次第に一日目は暮れてゆき、彼を病気だと思った宿の主人が気を利かせて食事の用意をしなかったら、彼は物も食べずにいたところだった。二日目になって彼はここを立ち去る決心が固まった。しかしどこへ行けばいいのか。太陽が彼に輝きかけるところはここしかなかったし、ここしか彼が呼吸できるところはなかったのだ。不幸な男のご他聞に洩れず、彼も戦争に行つて憂さを晴らすことを思いついた。しかし、彼は戦争が本来どんなものか間近に見て知っていた。大胆な企て、大事件、力強い行為、途方もない力などが次々と絶え間なく起きることなどない。そんなものは詩人の夢想であつて、夢想だから魅力的なのだ。だが実際のところ戦争とは、今も行われているように、決して起こらないことを退屈しながら待つことなのである。何しろ結局闘いそれ自体は相手が逃げ出すのを待つことにすぎないのだから。それに、この待つという悲しい行為は、どんなに味気ない社交の集まりや、いかに下らない揉め事や、どれほどの蛮行や、いかなる大きな不快さや病気の場合にも行われるのである。そうならば、それは待つ人の心に自分自身の苦しみに浸る計り知れぬほどの時間を残してきたことになるのではあるまいか。軍事それ自体は、顕彰されたいという抗い難い衝動によってのみ、活気付けられ、神聖化されるのである。だからこそ我々も常に、強いられてではなく、全く好

意的な衝迫からそれに身を投じたあらゆる人々を、不運だとか不器用だとか言ってきたのである。剣によって世人を教え諭すべきではない。剣を抜く者は、剣によって命を失うことになるからだ。^{*10}三日目になると彼はこう考えるようになった。たとえドロレスと幸せに暮らすことができなくても、自分は彼女の幸せのために生きていきたい、と。父親が恋しくて彼女が流した涙は本物だった。彼女の話では父親は東インドにいるという噂が広がったそうだ。それで彼は彼女の父親を探し当てて連れ戻そうと決心したのだ。さっそく彼は自分の後见人達に宛てて必要な手紙を書いた。彼らの管理はもうすぐ終わることになっていたのである。まだ手紙に封印をし終わらないうちに、以前伯爵令嬢の執事だった老人が心配顔で部屋に彼を訪ねて来た。老人は令嬢の名で彼に挨拶の言葉を述べたが、特に何を言い付かってきたわけでもなく、彼に病気なのかと尋ねてこう言った。お見受けしたところお顔が本当に真青でございますよ。お嬢様は貴方様のことをたいそう心配なさっておいででした。何を召し上がっても美味しいとおっしゃいませんし、いつも泣いてばかりいらっしゃいました。伯爵は、苦痛が心臓から石臼のように転がり出したように思え、喜びの涙が絶望の涙と隣り合って彼の手の上に流れ落ち、それを流した彼自身の目にも、それがどちらの涙かわからなかった。彼は全てを忘れてしまった。彼は全てを自分のせいにして、つまらぬ行き違いのために愚かにも思い違いをした、と思った。

— どうして彼に用心することなどできただろう。彼は一度も経験というものをしたことがなく、彼の賢さもたいていは他人の経験に依っていたのだから。

第三章

二人の和解と結婚

手紙はすぐに引き裂かれた。伯爵は愛するドローレスにもう一度会おうと急いだ。彼は彼女が二言三言佻びの言葉を言ってくれるだろうと思った。しかし彼が入って行くと、彼女は微笑んだ。そして彼女の微笑がとても美しかったので、彼はこの美しい悪意の魅力には、とてもかなわないと思ったほどだ。彼は彼女に自分の気持を語ろうとしたが、彼女はそれには触れず、イエス様みたいになりたいのでしょ、と言って彼をからかった。しかしそれはとても感じがよかったので、彼は気分を害することはなかった。彼女は本気で伯爵の突然の腹立ちを責め、冗談を言いながら彼を許した。彼は彼女を抱きしめ溜息をついた。しかしこの時伯爵はとてもいい気分になり、自分の運命を彼女の運命に委ねてしまった。そしてこの日、今後彼女が彼の良心を支配することが決定したのだ。彼女自身の落ち着いた性格が彼自身の活動、彼自身の仕事を麻痺させた。彼女は彼をつまらないことで悩ませ、彼のより高度な使命、つまり彼が行う全てに含まれる純粹さや完成を求める努力は、彼女には暇つぶしの冗談の種となった。そしてある時彼が本気で腹を立てたことがあったが、彼の気持ちを宥めるには、彼女は結婚前のシチリア旅行の計画を口にするだけでよかった。彼女の新鮮な魅力、限らない優雅さは、彼女が彼の考えに逆らって行なった全てにおいても見られたが、それはどんな高まりつつある不和をも、まるで若枝を曲げて拱廊にするように宥めることができた。和解はいつも諍いよりもずっと実り豊かだった。そして改めて親密になるたびに、ますます激しい好奇心が呼び覚まされた。しかしこの外の力はこれからも二人の仲を強く結び付けていくだけに、二人の目にこの内面の違いがすっかり明らかになったときには、全ては激しくはじけ飛んでしまうことだろう。ドローレスは伯爵の中の多くを本当に愛していた。しかし彼女は自分自身を除いては、一人の人間をその全ての特徴とともにまる

ごと愛することができなかった。彼は彼女の特異な性格を類まれな愛で尊重し、育み、彼女の過ちや不作法も偽装であり、彼女特有の長所なのだ、としばしば自分に言い聞かせた。彼は、彼女の善良な天使クレーリアが彼女をモはや監視しなくなってからというもの、彼女が親しい人の前に出たときに好んでやっただろう過ち、本来ならある仲間の女性にしか受け入れられないような過ちまでありがたがった。それで彼女は時には夢中で遊ぶように思われたが、それはそもそも暇をつぶすためだけだった。しかしドロレスが全く思い上がることなくあらゆる貧者に気前よく振る舞うのがわかったので、伯爵は自分自身にこう言い聞かせるのだった。自分の運を試してみたいところにこそ彼女の気高い性格が現れているのだ、彼女は天の力の御加護に、より近づいていると感じているのだ、と。他の人達が喜ぶというだけの理由で彼女はしばしば陰口をたたいた。彼はこれを観察が特別に鋭い証拠であり、身の周りの悪しきことを何一つ我慢できないのは、彼女の中にある特別の純粋さのせいだと思った。それで彼女と喧嘩をした時には、彼は惚れた同士のふざけ合いという古い諺を思い出すのだった。つまり彼は心の中で彼女の全てを良く、賢明だと取ろうとしていたが、それは思考の迷宮というものなのだ。彼の未成年時代と決められていた惑星の年月も、愛というこの彗星が描く軌道の真っ只中で終わりとなった。彼は後見人達が自分に損害を与えたところでも善意に免じて許し、自ら自分の財産の管理をすることになった。領民達は十分長い間利己的な管理人達によって厳格な規則に従って管理されてきたが、今度は何か良いことをしようとする何事にも彼から父親的な援助を与えられることとなった。彼は自ら学校の世話を引き受けた。彼は全てを将来に期待し、そのために自ら授業をしようとした。少なくともときおり教師の監督のために。そこでは生徒達が字を書けるかどうかということはあまり重要視されなかった。しかしドイツの名譽、神聖にして偉大な人物を思う気持、これが生徒達の心に書き込まれたのだ。このように最初の諸設備が整えられると、これには彼の居城の装飾も含まれていたが、彼はきらびやかな興

入の品々を積んで、ドローレスの許へ戻った。彼は何よりもまず彼女を先祖伝来の古い城に連れて行き、そこで結婚式を行おうと計画していたのだった。ところが彼女は初めて会った時のことを彼にとっても感動的に思い出させたので、伯爵は後見人に任せている間に集まった金の一部で、彼女の父の邸を買い取ることになった。債権者達は別の相手だったらもっと安く譲っただろうが、それでも彼はこれを安価で手に入れたのだ。ある裕福な土地持ちの親戚が思いがけず亡くなったおかげで、伯爵は大きな財産を所有することになった。というのも伯爵の領地が手近なところで三倍に増えたからだ。急いで彼はまことに立派に家を整えた。盛大な結婚式が、二人が望んでいたように、二人が客の全員から予言されていたように、このすばらしい家の落成式となり、二人は幸せだった。客達は、彼がしばしば物語った伯爵と伯爵夫人の物語を感じのいい牧歌劇にして演じた。その時二人が何を感じたか、心の中で何を誓ったか、客達が解散した後でどんな幸福が二人に残ったか、我々は推測することも描写することもできない。二人とも心配事もなく若々しかった。そして長いこと、この日とこの夜が来るのを待っていたのだった。

第 四 章

伯爵夫妻、田舎へ旅立つ。 醜い男爵と気違いイルゼ

伯爵には思う存分仕事をしたいという抑え難い気持があり、伯爵夫人も牧歌的な夢想と、大勢の下僕の前で思い切りきらびやかに慈悲深く振る舞ってみたいという願望を持っていたので、新婚の二人はさっそく伯爵の先祖代々の城のある田舎へ旅に出ることになった。二人は心尽くしの陽気な歓迎を受けた。凱旋門と花が惜しみなく飾られ、その上見るもの聞くものが初めてのことばか

りだったので、城も庭園も、全てがたいそう伯爵夫人の気に入った。こうして多くの人々と新たに知り合いになったので、彼女は初めの一か月は退屈せずに済んだ。ところが、後になると退屈し出した。若い奥方や貴族の令嬢の常で、絵や音楽といった芸術に大がかりに手を染めたものの、途中で止めてしまったのである。彼女は田舎の生活のあらゆる仕事や楽しみに遊び半分に加わった。しかし、まさにそのせいで不愉快になり、自分のやらなければならないこと、見張りや手間や悪天候などの辛さが彼女にはどうにも堪え難いものとなった。彼女は都会風のやり方を押し通し、じきに隣人達と仲違いをするに至った。彼女はどうしても遅く食事を取りたがったし、わずかの煙草の煙にも我慢がならなかった。彼女は、人々にとっては非常に真剣な事柄を冗談半分にけなしたり、厳かに崇めるべきその他の事柄を軽蔑したりした。この人々はかたくなで、自分の家でこちんまりした暮らしをするうちに風変わりになっていたので、彼女は彼らと話が通じなかったのだ。この新しい付き合いで、蟹壺を買ったり気に入られたりしたが、彼女は何とも思わなかった。こうして、彼女はそれまでは田舎貴族や小作人や説教師の家族を話し相手にしていたが、見当外れの率直さのせいでその細々とした泉すら早々に塞いでしまった。ただ一人、ひどいあばた顔の隣人で、以前は外国で軍務に就いていた男爵だけは、持ち前の全く乱暴な気性で真っ向から彼女に対抗していた。二人が話すたびに侮辱の応酬になり、とりわけ彼女が好んで嘲笑の種にしたのは、彼の実りのない嫁探しの件だった。男爵はもう何年も前から髪飾り用に丸々一束の羽毛を花嫁に進呈するつもりで鷺撃ち^{さぎ}をしており、毎年決まった数の鷺鳥を絞めさせては花嫁の寝床の詰め物をさらに良くしようとしていた。しかし、羽毛の束はひ弱な首ならばほとんどもう抑えつけてしまっていたろうし、寝床も天井の梁に届かんばかりだった。それでもなお彼は結婚してくれる美女を見つけられずにいた。彼は残酷な仕打ちのために、まるで青髭^{アザテ} *11 のようだと評判が悪かった。というのも、お前は病気なんかではないと言い張って最初の妻を宗教の慰めも与えずに死なせたか

らだ。彼は同じ残酷さで自領の農民達を取り扱い、犬をけしかけたり、のろまな女中達の指を亜麻で縛って火を点けさせたりしていた。彼はそれだけでも伯爵に憎まれていた。さて、どんなおしゃべりでも、社交を楽しむ礼儀から冗談を言うときにはそれにふさわしく程好い一線が引かれているものだが、それを越えてしまうことがある。実際、ある朝のこと男爵と伯爵夫人の間でこれが起こった。彼は彼女に向かってひどく辛辣な言葉を吐き、腹を立てて帰って行ったのだ。伯爵が帰館してみると彼女はただ一人寝椅子に横たわって泣いているところだった。彼女は伯爵に自分の怒りを訴え、さらに男爵にこの仕返しをしてくれと言わぬうちから、もう彼女の憤怒は倍加して伯爵に移ってしまい、彼はほとんど彼女の話を終わりまで聞いていられなかった。彼は、ドイツではある階級の間でしか取り入れられなかった決闘が名誉を玩ぶ嘆かわしい手品であり、その一方で数多くの庶民階級の人々がそれを恥ずべきこととと思っていることを、何百回となく実例を挙げて説明してきた。原初の時代のような神の法廷は存在しないこと、その際一般的に信じられる名誉の回復はないこと、また決闘が、時にはそれを命じ、時にはそれを禁ずる国法や慣習に対して曖昧な関係にあるので、それはあらゆる制度にあるあの曖昧さの悲しい徴を表すものであることを説いた。制度というものは名誉と同様で、まさに民族における最も本質的かつ最も高貴な諸関係を、普通に行われているものの考え方とは関係なく恣意的にねじ曲げ、使用し、抑圧するからである。それが彼の考え方であったが、激情に駆られたこの瞬間には、彼の階級になじんだ心情の方が彼を捉えた。あの男爵がいなくなってもどうということはない、とさえ彼は考えた。農民達はひどい領主から解放されるし、誰もあいつには我慢できないのだから。さて、こう考えながら彼はクーヘンライター製のピストル^{*12}を革ケースに差し込むと、ひらりと黒馬に跳び乗り、私のことを思い出してくれれば仕損じはしないわ、という伯爵夫人の呼びかけもはや聞こえなかった。彼は半時間も走らないうちにもう男爵の目の前に立っており、このような状況では尊重される冷酷さを装っ

で、危険な申し出をした。男爵はしかしとっくにこのような状況からは脱していた。彼は伯爵に笑いかけてこう言った。いったい、俺がそんなことに係わり合うほどの気違いだとも思っているのかね。だって、俺はこの先何千という楽しみが持てるんだし、不名誉極まりない謝罪をしたからといって何ほどのこともないからな、と。実際、彼は非常に落ち着いて大声で書記達を呼び、その一人に屈辱的でへりくだった謝罪文を口述筆記させ、署名をして封印を押した。男爵はその後も以前と変わらず陽気だったので、男爵が外国の軍務で示した勇氣の幾多の証拠を知っていた伯爵は、彼の時代と彼の民族の名誉の全体から、大きな事件もないのに、まさにそれ自身によって引き出された気性というものに感服した。彼は驚愕を覚えつつ、革命にはまさにこのような人間を是非とも先頭に立てる必要があると考え、彼が時代の沸き立つ血潮を染み込ませたたくさんの青臭い革命計画は、この意味深い一瞬に目の前から消えてしまった。大胆不敵な者だけが自分自身のうちに新しい世界を開くのだ。善は永遠だったのだ。存続するものは善く解釈されるべきだ、とある深遠な思想家^{※13}が言っている。ドイツはこれに従って発展していくのだ、と。急いで馬を走らせながら、愛する祖国が静かに前進しつつこのように形成されていく様に思いを馳せていると、彼は大変気分が良くなった。彼はもう小屋を見下ろすところまで行き、全てがくつろいで独立した自由の中にあるのを見た。すると、どんなつまらない建物にも美しい均整があり、どんなみすばらしい衣服にも快適さがあることがすでに、より高次の生が隈なく隅々まで広がっていることを明らかにしていた。詩人達がすでに長いこと望んでも叶えられなかった花盛りが出現するのだ。しかし、彼は実に心地良く楽しかったので、今や美しさの真盛りにあって全てのものを驚かせ屈服させてしまう妻の姿が、その都度思わず知らず目の前に浮かんだ。彼はそんな時つい自分に向かって大声でご機嫌ようグリュックアウフと口にしてしまうのだった。彼は今度は陽気になって夢中で愛馬に拍車を掛け、足元に響く道を見ないで、頭上でざわめき揺れる木々

の梢ばかり見ていた。彼はまだ正しい山道を走っているものと思い、よく知った浅瀬まで来た時、尻込みする馬に拍車を掛けて川の中に突っ込んだところが、川に入るや否や、実はこれが別の場所で、深く激しく渦巻いているのに気づいた。彼は馬を離すまいとしたが、それは到底できなかった。水の流れが彼の体にあふみに笠を押し付けていたのだ。馬は泳ぎが下手で、ますます深く沈んで行った。ふと見ると岸辺に好奇心の強い、低くいなく馬が現れた。愛馬はすぐに新たな力に満たされ、懸命に浮かび上がると間断なく岸に向かって行ったが、草を食んでいた馬は不格好な方向転換をして、不器用にそこから森の茂みの中に入って行った。双方の馬が惹かれ合ったことでこのように命拾いをしたことは、いかに偶然としても彼に深い感銘を与えた。せっかく草を食んでいたのに、逃げ出すという馬鹿なまねをして餌にありつけなくなった馬の、この不器用さを気の毒に思った。彼は城でこの馬に餌をやらうと考えた。城まで連れて行こうとしたが、馬は彼の手を負えなかった。それで多少抵抗はしたものの愛馬の首を城の方に向け、城に近くなるほどますます早く駆けさせた。とうとう配下の猟師達の角笛が聞こえ妻が布切れを振って合図をした時、彼は全速力で門道に飛び込み、ひらりと馬を下りると拍車を鳴らしながらドローレスのところまで階段を登って行った。

「無事だったのね。じゃあ彼は死んだの。」と彼女は彼に向かって声を上げた。「あなたの掃りを待ち焦がれていたのよ。」

「二人とも生きてるよ。」と伯爵はにっこり笑って答えた。「人の生死にかかわることなのに何で言い方をするんだい。ちょっと画びょうを刺しても泣くくせに。死んだとも、死んでいないとも、君の好きなように言うがいいさ。より正確な意味では、彼はとっくに死んでいるがね。 — 君の名誉はこの鞆の中にある。さあ、ご覧。すっかり濡れてしまったけど、消えても、擦れてもいない。」

伯爵夫人にとって、自分を侮辱した男が死ななかったのは、本来必ずしも具合の良いことではなかった。その理由は後でお教えすることにしよう。だが、

彼女は愛撫することでそれを押し隠した。彼女は伯爵に、その日ある女隠者のところで過ごし、たくさん面白いことがあったと話して聞かせた。

「その女はどこに住んでいるんだね。」と伯爵は好奇心をそそられて尋ねた。伯爵夫人は遠くの森の一角を指した。それから、侍女のロザリーエが自分をそこに連れて行ってくれたのだと言った。その話では、そこには全体が芝草で覆われ、二つの小さな窓と戸が一つ付いた小綺麗な小屋があったという。その前で、顔が異様に片側にひきつり狡猾な目つきの日に焼けた娘が鍋を二つ三つ洗っていたが、その娘は彼女にこう呼びかけたというのだった。「どっから来たのすばらしい別嬪さん、真白な着物の裾を汚してさ。」

「気でも違っているんじゃないかね。」と伯爵が尋ねた。

「決してそうじゃないわ。」とドロレスは答えた。「度外れて利口なの。でも、農民達にしてみれば、利口すぎるし機知がありすぎるのよ。彼女は親兄弟と許婚者のことを散々馬鹿にしたの。それももっともな話なんだけど、おかげでとうとう両親に町の癲狂院に入れられたというわけよ。彼女は、そこで町の人達の間で混じると皆にたいそう感謝の言葉を言うようになったので、頭は完全にまともだというお墨付きをもらって退院したの。ところが父親のところに戻って来るとすぐ、片方の靴下を裏返しに穿いている、とひどく父親の悪口を言ったので、父親も、村の誰もが彼女を迎え入れようとしたがらなかったの。それで意地になって村を出たのよ。彼女に言わせれば、馬鹿ばかり増えて利口の居場所がなくなってしまったから、というわけ。彼女の許婚者は自分の親戚に彼女を預けようとしたけどだめだったの。彼はこのことを悲しく思って、彼女に自分の家を提供して、今からもうこの家で自分の妻として思い通りにやってくれと言ったの。でも彼女は彼に冷たくこう聞いたわ。「それじゃあ、あたしに皆のために煮炊きをして、パンを焼いたり、ビールを作ったりしろって言うのね。夏は野良仕事、冬は糸紡ぎ。痛い思いをして子供を産んで、この小さくて汚い動物達にお乳をやって、洗濯をして、おむつを替えろって言うの。あたしはあ

んたが本当に好きだけど、それだけじゃあ何にもなりゃしない。このまま生娘でいて、遣い走りでもして自分の生活費を稼ぐつもりよ。そうすれば毎日新しいことが聞けるし、誰にも釈明しないで済むわ。」それで許婚者は涙ながらに彼女にその小屋を建ててやり、涙ながらに彼女と別れたというわけなの。」

「おぞましい話だ。」と伯爵は声を上げた。「その女は魔女になるに違いない。いや、もう魔女になっているよ。」

「とんでもない。」と伯爵夫人は言った。「すぐ彼女に会わせてあげるわ。醜くなんか見えないし、澄んだ目をしているのよ。それに、ねえあなた、彼女を私の二人目の侍女にすることにしたの。あなたもきっと彼女に慣れると思うわ。」

「ねえ君、」と伯爵はそれに答えて言った。「言うまでもないが、君の望むことなら僕は賛成だ。でも考えてごらん。そんな厚かましくふてぶてしい女が運良く行ったら、まっとうな娘達に間違った出世欲を起こさせることになるじゃないか。金というものは、辛い仕事で得られる以外は、よくよく公平かつ公正に分配すべきものだ。町にいれば相当の浪費をしてもいいさ。町では、わずかの家賃を貯めるのにどれほど苦労したかなんて、誰も知らないからね。ところが君の周りに娘が二人もぶらぶらしていたら、貧しい人達の目に付いてしまう。母上のときには一人しかいないのが普通だったんだから。だが、そんな役立たずの娘がどんな上流の人だってもできないような贅沢をしていたら、それどころの騒ぎではなくなるんだよ。」

妻が甘えると夫は黙った。「あなたがそんな人だから、」と彼女は言った。「私はこれまで一日中一人で座っていたのよ。だって、私を一人きりにするんですもの。不安になって、あなたが帰って来ないかと窓から見ていたの。その間日が暮れるまで鏡の前で一人で踊っていたわ。それなのに、あの変わり者の娘イルゼとちょっとおしゃべりすることも許してくれないの。」

「ああ、あのイルゼか。」と伯爵は言った。「あの女ならよくからかったりしたものさ。子供の頃から図々しい返事をする奴だった。君が気に入ったのなら雇

ってやりたまえ。でも僕の前には姿を見せないでもらおう。それははっきり言っておきたまえ。」

こうして二人の話は済んだ。伯爵はこの話の中で、妻の愛と従順の新たな証しを数え切れないほど見つけたと思った。実を言えば、この小狡い娘の気違いイルゼは得意のおしゃべりで伯爵夫人をすっかりまるめ込んでいたのだ。イルゼは実に上手いこと夫人におべっかを使い、彼女の前にひざまずき、彼女を賛美し、秘密の色恋沙汰やら冒険の話やら、近郷近在のつまらない噂話をたくさん彼女に話して聞かせた。それでこの日は、伯爵夫人が田舎で暮らすようになってから最も楽しい日だったのだ。伯爵が野を越えて駆けて来た、とイルゼが言い、ドローレスが彼に向かって手を振るまで、伯爵と彼の決闘のことはドローレスの頭からほとんど抜け落ちていたのである。伯爵は翌朝早く起き、まだ昨日の様々な感情に満たされたまま、心から妻の気分を思いやっていた。彼は静かに微笑みながらそこに座り、昨日自分がいない間に彼女が夢想したかも知れないことを独りごちた。我々が自分の心服する相手の胸のうちから出てくる愛しさや優しさを考えるのはとても甘美なものだ。我々は心の中にその人を捉えているのだから。それで伯爵はこう想像した。彼女は彼にとって貴重な一瞬一瞬をことごとく美しく思い返しつつ、彼の口ぶりを真似、夢見るようにおしゃべりしていた、と。彼が帰って来ると思うと不意に嬉しくなり、思考の脈絡を忘れてしまい、彼女の心を満たしていた想いに戻れなくなる。そこで彼女は実に切々と声を上げてこう言うのだ。

彼女は家にいて ^{※14}

何が夢見るこの心を満たしたの。

それは忘れていた輝き。

愛する心は重くなる

こうして独りぼっちで。

すっかり影が降りているのに、
それに気づかなかった、
美しい話の数々が消え失せたのだわ、
私の不思議な光景が。

夕べがあちこちの湖面を
楽しげな息吹で波立たせるように、
一つ考えが揺れ動いただけで、
私の心まで動かしてしまった。

私は思い、探し、跳びはねる
こうして前へ後ろへと、
考えを鳥かごへおびき寄せ、歌い、
一度振り返る。

もはや鏡の中に
私の愛らしい姿は見えず
道を外れて森の奥深く
逃げ込みたいほど。

何てああ森がこんなに明るくなるの、
空は、空はこんなに澄んでくるの、
若者が戻って来るのだわ、
そうすれば全てが全てがわかる。

アルニム（山下 剛・林 雄作）

彼は拍車でも掛けるように激しくギターを掻き鳴らし、家路を急ぎつつそれに応えて歌うのだった。

忠実なこの目、*15
こんなに澄ましたこの耳、
新たな愛は
幾千倍にも。
何を遠くに見ているのだ、
何を見るのが好きなのだ。
森の上高く
純白の城、
いよいよ早く
我が黒馬は駆けた、
胸は、こんなに熱く、
白く泡立った。

忠実なこの目、
こんなに澄ましたこの耳、
新たな愛は
幾千倍にも。
何を遠くに聞いているのだ、
何なのか君の星は。
布切れが振られ、
角笛が響く。
日は沈み、
私の胸は大きく波打つ。

門は大きく

音を轟かせて開く。

第五章

商務顧問官ヌーデルフーバーと公子教育係キレ

伯爵は楽器に合わせて歌を歌っていた。そして歌も伴奏もすっかり上手になると、妻をそれで起こしてやろうと寝室へ向かった。すると妙なことに男と話す声が聞こえた。その大きなながら声から、彼はそれがあの男爵であることがわかった。部屋に入ると、まるでベッドから跳び起きたばかりといった姿で妻が窓辺に立っているのが見えた。肌着が風に吹かれ薄地の被り物が揺れていた。伯爵の姿を目に留めると、彼女はもっと近くに来るようにと合図をした。彼が窓の外を見ると、そこには帽子も被らず、死刑囚の獄衣を着たあの醜男の男爵がいた。それはまるで教皇とその愛人の前に出た皇帝ハインリヒのようだった。^{*16} 違いといえば、ここには雪がないことぐらいだった。「また私の屋敷に足を踏み入れるとは、」と伯爵は声を荒げて言った。「どういふ見なのだ。」 — 「ですから私は事実またこうして庭内に留まっております。」と男爵は答えた。 — 怒りに駆られたときに全く思いがけないことを言われるとしばしば面喰ってしまい、上手くやり返す慎重さが奪われてしまうものだ。だが、怒っていると黙っておれず、それでついどんな愚かなことでも口走ってしまうのだ。「ここには^{ホーフ}宮廷などない。」と伯爵は答えた。「それに仮にあったとしても、貴様など金輪際雇うものか。」 — 男爵は平然と答えた。「もし^{ホーフ}宮廷がないとおっしゃるのでしたら、私が立っておりますここも伯爵様の庭内^{ホーフ}ではないことになります。そうなると伯爵様は私に出て行けとは言えないわけです。」 — 伯爵夫人が二人の間に割って入り、夫に接吻して言った。男爵は私に心底謝り、

心を入れ替えるので、どうか仲間から外さないでほしいと言ったのだ、と。

— 「妻の願いとあらば仕方がない。」と伯爵は言った。「こちらへ上がって来るがよい。貴様より目障りな者は他に大勢いるからな。だが、まず身なりを整えることだな。」 — 男爵は獄衣をはらりと落とし、普通の衣装となって言った。「すぐに参ります。伯爵様もまずお召し物をちゃんとなさいませ。それに知り合いを二人こちらへ呼んでおります。きっと大変お気に召しますぞ。二人とも私と同様正直な男達で、いささか正直すぎるくらいはありますが、ちゃんとした、話の面白い奴らです。今日で今までのことは全て償いをつけますから。」

— 「はっきり言うておくが、」とこれに対し伯爵が言った。「貴様が今日本当にまっとうに振る舞わなければ、ただでは済まんぞ。」 — 伯爵夫人はこの新しい集まりが楽しみだった。

二時間後に醜男の男爵は友人兩名を連れてやって来た。少なくとも彼は彼らをそのように呼んでいたのだ。そのうちの一人は骨格のがっしりした老人で、両肩の間に大きな頭がめり込んでおり、いかにも丈夫そうな衣装を身に着けていた。縞模様で緑色のピロード地の上着とチョッキに、黒ピロードのズボン、ゲートルと油を擦り込んだ長靴といういで立ち。顔はといえば、がさつな剽軽者の表情だった。もう一人は、鼻が高く細く、実に気難しい眼つきをしていた。旧式の宮廷風の衣装で、安物の剣、大きな留め金がついた靴、髪袋といういで成りは、かつての大都市の住人のものだった。男爵は、前者を商務顧問官のヌーデルファーバーという男で、スイス出身の著名な画家にして画商であると紹介し、後者を公子教育係のキレであると言った。ヌーデルファーバーはすぐになれなれしくなり、手を取り接吻すると、すっかりくつろいだ様子になった。キレはこの男のがさつさをとても上品に微笑んで見ており、その上この男をからかってみようとした。ところが、小さなボローニア犬が大きな肉屋の犬にちょっかいを出すようなもので、当の男はそれにはほとんど気づかなかった。それに対しヌーデルファーバーは全く不意にがさつな思い付きをいろいろと言っ

て、公子教育係の軽装をひどくからかいの種にした。 — 朝食の際、話が少しばかり行き詰まった時、男爵は伯爵夫人に尋ねた。「さて、いかがですか、私の友人達はお気に召しましたかな。この男達は私ほどごろつきではございませんでしょう。しかし彼らにもすぐに芸を披露させましょう。おい君達、」と彼は二人に言った。「こちらのお二人に、君達のことわかるように、私が腹を抱えて笑った話を一度してみてください。 — 君達の一代記はだめだぞ、きりがなくなってしまうからな。始めたまえ、公子教育係君。だが君の気取った宮廷のお話は御免だぞ。君が誰にでも辛辣な答えを返した話など聞きたくないからな。公子が君の許から失われた不幸な出来事が聞きたいだけなのだ。」 — 「どちらの公子様ですか。」と伯爵夫人は尋ねた。 — 「奥様のかつてのお相手の若様でございます。」と男爵は答えた。 — 伯爵夫人は言った。「そのお話を是非とも伺いたいですわ。その方は小さな頃から私には大事な方だったのです。子供達がそうするように、私達はお互い好き合っていたと言ってもいいくらいでしたから。」

第六章

失われた世継ぎの公子

これを受けて公子教育係は、足を組んでゆったりと座りながら、じっくり考えた末に話を始めた。

「男爵様直々のご意向で、お預かりした若く前途有望な公子を教育した私には名誉の全てとなったかつての様々な出来事については黙っておれとのことですし、私の良い教えの全てを台無しにした心痛むその日のことだけをお話ししなければならぬのですから、私は少なくとも、名誉回復のために、教育の際に従ってきたところの、また公子の教育の締めくくりとなるはずの旅行において

も忠実に守っていた原則の数々を、ご披露せずにはおれません。」

「そんな堅苦しい前口上は止めにして、」と男爵は言った。「いつものように話してくれたまえ、そうでないといつまでたっても始まらないから。要領よく話してもらいたいのだ。君は公子と一緒に旅から帰る途中、脇道に入ると湖に出た．．．」

公子教育係「おっしゃる通りでございます。私は公子と全く二人きりで深い切り通しを馬で進んでおりました。木の根っこが私達の頭上に垂れ下がっておりました。道は切り開かれたばかりで地面はまだ濡れておりましたが、雨が小川となって流れたところをたどって行きますと、大きな湖の岸辺に出ました。岸辺には見渡す限り杜松の実の藪が生い茂っておりました。私達は一軒の小さな家とその傍らに一艘の渡し舟を見つけました。家から出て来た渡し守は、砦に渡りたいのかと私達に尋ねました。まるで青いトルコ石に乗った真珠のようにその砦が湖の真中に浮かんでいるのが見えました。私達は喜んでその申し出を受けました。私達はたくさんの小さな侯爵領を通り過ぎるうち、ある伯爵の所領に入り込んだことにはっきりと気がついていました。というのも伯爵はその当時奇言奇行で広く噂されており、そのためこの砦も長いこと人々の噂にのぼっていたからです。それは見事な砦で、湖の真中の平らな場所に石の塊をいくつも沈めて規則的に造り上げた四角い島の上に、切り出した石で緻密至極な築城術に従って堅固に築かれていました。岸から撃った砲弾もそこまではほとんど届きませんでした。それに対してすら砦にはきちんと砲郭が備えられていました。渡し守は途中でこんなことを話してくれました。守備隊は年寄りの傷病兵の中隊で編成されているが、これらの年寄り達は見張りが勤まらなくなってしまったので、町一番の浮かれ女達が捕り抑えられて、赤い軽騎兵の軍服に押し込まれ、更生のために砦に送られたこと。そこで女達は訓練を受け、傷病兵達と交代で勤務にあたっていること。女達が脱走するのを防ぐために、この一艘の渡し舟以外は全ての舟が沈められたこと。それに、情人がいないので、たいていの

女は良い娘になって、ロトが自分の娘達に抱擁されたように^{*17} 老人達を抱擁している、などと言うのです。私達はこの駐屯地にひどく好奇心をそそられました。私達が到着し、渡し守がいくつか合図を送ると門が開けられ、この奇妙な風体の、馬に乗らない軽騎兵隊の女大尉が、実に見事な軍隊式の作法で私達に名前と階級を尋ねました。その女の刺すような黒い目には炎が赤々と燃えていました。「友よ、」と女は軍服を着ていた公子に言いました。「戦には何も新しいことはありません。私達を一度だけでも呪わしいつまらない任務から自由にしてくれると言うなら、いっそ悪魔にさらわれてもいいくらいです。」—私はびっくりし、またいささかくたびれてもいたので、この女大尉が公子に与えた印象に気づきませんでした。残念ながら私はその結果からこれに気がついたので、その時にはもう後の祭でした。朝になると渡し舟とともに公子と女大尉がいなくなっており、砦の指揮官がとても乱暴な言葉で罵りながら私にこう話した時、私は何と驚いたことでしょう。指揮官は、公子が渡し守を買収して、彼と女大尉が自分の許可も得ず向こう岸へ渡ったに違いない、と言うのですから。女大尉は夜に門の見張りに立ち、それでこんな大胆なことも易々とやってのけられたのです。後になって初めて知ったのですが、渡し守は舟を沈めた後でその二人とともにフランスへ逃げ、公子様はそこに今でも何千もの自堕落な仲間のならず者達と一緒に全く人目に付かずに住んでいるというのです。公子の運命を思うとつい涙が出ます。私はこうして職を失くし、流浪の身となりました。しかし数日経つと、もっと差し迫ったことが私を苦しめたのです。始めに渡し守にあらゆる信号が送られましたが、とうとう彼の小屋はもぬけのからであることがはっきりしました。そこでこれらの合図を非常を告げる砲声に変えましたが、荒れ地の羊飼いはこれを何かの祭の祝砲だと勘違いしました。この時初めて私達は自分達の苦境を知りましたが、公子は軽率にも逃走する時おそらくこのことを何一つ考えなかったのです。砦は兵糧を受け取るために、いつもは毎月隣町へ人を遣っていました。その月は終わろうとしていました。私達は

やむを得ず一人当たりの量を減らしたにも拘らず、まもなく食べるものがなくなっていました。砦は水によって文字通り封鎖されており、私達は自分達が降伏する敵がいなことを思えばしばしば泣きました。私は魚を釣ろうと思ひ、そのため研いで尖らせたヘアピンを釣針にしました。糸は服の縁飾りから取りました。しかし砦全体がすっかり石造りで、清潔に保つためにその上には土くれ一つなかったので、一匹のミミズも見つけれませんでした。ですから、そこでは種蒔きや刈り入れなど全く考えられませんでした。クレッソンの種がいくらか、粗末な漆喰でできた領主の彫像に蒔かれました。しかし指揮官がそれらをみな一晩で食べてしまいました。鼠どもは決して島には上って来ませんでしたし、鳥達も案山子のように砦の隅という隅に立っていて見張りをしている赤い軍服の軽騎兵をずっと怖がっていたのです。私は旅用の袋にゲスナーの『最初の船乗り』^{*18}を持っていました。私はその発明を面白く思ひ、それを真似ようと木を探しました。しかし夏のことだったので、駐屯地には煮炊きをするにも杜松の柴しかありませんでした。建物はみな屋根の無い丸天井で、平たい石で覆われていました。木でできているものと言えば、二三の机、二三の樽、傷病兵の義足が十本だけでした。どんな物好きでもそれで舟を造ることは無理だったでしょう。泳いで渡るにはしかし距離が遠すぎました。そんな甲斐のない助かる試みをしているうちに恐怖の日が近づいてきました。それまで全ての食糧を大事に節約してきましたが、他の者の生命を救うために誰が自分の生命を提供するか、籤引きで決定しなければならなくなったのです。傷病兵達は勇敢にもこう主張しました。自分達はこれまでも随分命賭けでやってきた、自分達は年を取った、自分達が皆のために名譽の死を遂げましょう、と。それに対し、女軽騎兵達はこう主張しました。自分達は傷病兵達を食べることはできない、それは思いやりからでもあるし、またそんな老兵ではあまりに肉が堅く骨ばっており、実際たいていは滋養分がないからだ、と。指揮官は最後に私を指さしました。もとはと言えば私の落ち度でこんな大変なことになったのだから

ら、と言うのです。皆の意見が一致しました。しかし私は言いました。我が身を犠牲にする覚悟はできています。ならばその前に、良心に従って、主君に宛てて是非私の教育方法と公子の進歩に関して慎んで報告したいと考えます、と。 — 「あいつがいなくなったんだから、」と人々は叫びました。「お前も消えてなくなれ。」 — もし私が不安に駆られながらも、どこからか助けが来ないとも限りませんので、どうかもう一度四方を見回すことをお許し願いたい、指揮官殿はその間にナイフを研げばいいでしょう、と言わなかったならば、きっと酷いことになっていただいでしょう。私が四番目の方角を見渡すか見渡さないうちに、岸の方から砲声がして人がいることがわかったのです。すぐに私達も信号を返しました。まもなく大勢の人達が向こう岸で今にも大きな筏を作り上げる場所が見えました。 — この惨めな飢餓に苦しむ者達と私自身の嬉しさをどう表現したらいいでしょう。何しろ私はまだ食べられずにいたのですから。軍服の様子からしてそれは味方ではなさそうでした。彼らは橙色の軍服を着ており、警戒の陣を敷き砲台を築いて私達を砲撃し始めたのです。ところが彼らは火薬をけちったし、そもそも全く距離が遠かったので、砲弾は私達のずっと手前でもう水に落ちてしまいました。そのために我が女軽騎兵達は彼らのことを間抜けな奴らと呼んだほどです。私達は隅々に、駐屯軍のハンカチを集めて作った白旗を掲げました。私達は、私達の飢餓を知らせるために、真中にパンの絵を描きました。旗に付けられたこれらの小さな印を、私達の包圍軍は自分達の砲弾が打ち抜いた穴だと見なしました。私達はごく下手^{して}に出て交渉に持ち込み、必死で抵抗はしたものの、あなた方の英雄的な精神がついに私達を征服したのだ、などと言って、ともかくははっきりした成果を引き出したいと虫のいいことを考えていたのですが、彼らはおも数時間規則的な砲撃を続け、そして優に五十人もの兵士が焼けた砲身の炸裂で命を落としました。赤い尾を引く砲弾が空中を飛んで来ました。砲弾はビューンという音をたてましたが、私達に損害を与えることはありませんでした。そして、もしもあの時

私達があればひどく餓えていなかったら、それは華々しい見せ物だったことでしょう。それでも砲弾にやられた数匹の魚が砦に打ち寄せられ、少なくともその場だけは私達を元気づけました。晩になるととうとう、兵士よりも大砲の方が優勢な敵が全軍を挙げて筏に乗り込みました。それらはつまり帝国征伐軍だったのです。そして変人の伯爵征伐の任務を帯びた侯爵は、自分のことを砲兵隊以外の何物でもないと思っていたのですから。^{*19}彼のどの部屋の前にも二門の八ポンド砲が置かれ、騎馬砲兵隊の半数の砲兵中隊が毎晩彼の寝室の前で見張りに立つのでした。彼としても、いない者を送るわけにはいきませんでした。そこで彼は直属の砲廠を杜松の実の生える島へ送ったのです。そしてこの最初の作戦はほどなく輝かしい戦果をもたらしました。というのも彼らが休止時間を含めてわずか四十八時間砲撃しただけで、私達はもう本郭を引き渡すところまで追い込まれていたのですから。ですが、三週間に及んだ水上封鎖のため私達はすでに消耗してもいたのです。大砲は重すぎて積めなかったものの、武装した筏が慎重の上にも慎重を期して、火縄に火を灯しながら近づいて来ました。櫂の音がする度に私達の胸はどんな恋しい思いで高鳴ったことでしょう。オーボエ奏者達が筏の上で演奏する厳格な行進曲も私達にとっては最も美しいダンス曲でした。そしてその音楽はみごとに統制されていました。なぜなら兵隊達は皆オーボエ奏者でもあったからです。舟が近づき、夜になって真暗になったところへ、我が女軽騎兵隊が空腹のあまり城門を開け橋を下ろしたので、敵は私達が攻撃を仕掛けてくるのではないかと勘ぐりました。敵は舟を停め、引き返そうとしました。その時私はまだまだ自分自身に余力があるのを感じ、メガフォンを通して彼らに呼びかけました。後生だからこの砦を占領してほしい、さもなければ私達の方がお前達を皆沈めてやるぞ、と。砲撃をする帝国征伐軍は一斉に火酒をあおりましたが、その臭いが何とも堪らず、私達は思わず涙を流しました。それから彼らは意を決して砦を占領しようとしてきました。しかしなが

ら彼らはメガフォンを通して次のような条件を付けてきました。つまり、彼らは砦に上陸するが、我が方はその倍の数の兵隊が舟に乗り込むべきこと、ということです。私は早々と舟に乗り込みました。どの女軽騎兵も腕に一人の傷病兵を抱きかかえていました。そうして私達はまもなく全員が舟に乗り込みましたが、その時はまだ敵の半分も砦に上陸してはいませんでした。またしても彼らはこれは罠ではないかと恐れました。そして砦の向こう側で蛙が啼き始めると、彼らは中へ通された味方の兵隊達が殺されたのだと思いました。とうとうこのやっかいな仕事も終わりました。彼らは上まで登ると、私達を嘲笑し、そして断言しました。こんなに完全な砦であれば自分達なら永遠に守ろうとしただろうと。それから私達は敵が筏に残していった食料にかぶりつき、再び一言も発しなくなりました。しかし顎の骨の方は、まるで安煙草でも刻むようにぎしぎししていました。とうとう彼らは私達のこのような有様を見て疑いを抱き、事実また私達の筏が進まないこともあり、穴を空けて沈めてしまうぞ、と脅すのでした。信号弾を打ち上げたり、料理用の塩に使ったりしたため、砦のごくわずかの火薬も使い切ってしまったということは、私達が一番良く知っていました。それで私達は悠々と岸へ向かいました。そこで私達は敵が残しておいた大砲や弾薬や馬を我が物とすることになりました。馬どもが腹を空かせ怯えていないのが、もう聞こえていました。わずかの昼間行軍で私達の小さな軍は伯爵領の首都に入りました。伯爵はこの事件の全てについてまだ何一つ聞いていませんでした。なぜなら彼は、書き割りの兵隊を作らせ、それをきつね罠の間に配置することによって戦線を形成し、自分の領土を守るという伯爵お気に入りの考えの実行に取り組んでいたからです。すぐさま彼は書き割りの兵隊とそれを指揮する貴族の将校団を連れて、砦を奪回すべく現地へ急ぎました。しかし私達の部隊は降伏してしまったため、軍旗という軍旗が全て奪われていました。軍法会議が、ハンカチはポケットの中で燃えたのかどうかと調査し、その上に描かれたパンの切れ端を見つけました。実際はハンカチを縫い合わせて作った非常用の旗

だったのですが、それらを燃えた跡だと説明した後で、私達は皆名譽回復の宣言を受けて裁判から解放されたのです。殿様は砦の包囲のために最高の準備をしました。その土地の周囲を計測し、次々と並行壕が掘られました。片や包囲されている者達は初めの数日はとても大声で叫んでいましたが、その後は静かになりました。殿様は夜毎信頼の置ける諜者を送り込みましたが、その報告によると砦はもぬけのからだというのです。事実征伐軍は餓えに耐えかねて、ある企てを起こしたのですが、その企てたるやトロイがあれほど長く包囲された古代の世界でもさぞや驚かれたことでしょう。蛙の啼き声から彼らは湖の浅瀬になっている一筋の道を発見したのです。その道はせいぜい膝が濡れるだけで、彼らはそこを無事に岸へたどり着き、まもなく故郷へ帰ってしまったのです。彼らの殿様は金属製の大型の大砲を失い、そうすぐには補充することができないので、木製のものを作らせ、霰弾の代わりにエンドウ豆を撃ちました。パレードの際には、見た目の効果においては何ら違いが見られませんでした。このように一国においてどんなに本質的な軍事上の改善であろうと、それは全くの偶然に帰せられているのです。私は公子様の行方を全く一所懸命探したことをほとんど忘れるところでした。私は新聞という新聞に尋ね人の広告を出し、過ちは許されました、堂々と領主の位にお就きください、と書かせもしたのですが、何の反応もありませんでした。公子様は依然として行方知れずのままで、それでこの私も、収入がないまましっぽを巻いて引き下がらざるを得ないというわけです。

「そのしっぽが我々の眼にも見えるようすな、」と男爵が言った。「で、今もそのやんちゃ坊主はお好きかな。」

伯爵夫人はこの男を誉め、これほどすばらしい公子教育係を引き合わせてくれた男爵に礼を言った。彼女は女軽騎兵の軍服についてなおも根ほり葉ほり質問をしたが、それは伯爵の気に入らなかった。しかし妻に対するそのような不

愉快さは決してあからさまには現れず、どうでもよいことに向けられた。伯爵は、今日のような軍事によってずたずたに切り裂かれている時代に、こんなに軽率にそのことを論じるのはとても不当なことだ、と言った。しかし教育係たる者が、自分でそそのかしておきながら、前途有望な公子がいなくなってしまったことをそんな風に面白おかしく誇張して語ろうとするとは全く不屈き千万ではないか、と言った。

「ねえカール、」と伯爵夫人が声を上げた。「あなたはいったい、もっと高いところからものごとを見ることができないの。そうすれば何だって冗談になるわ。」伯爵はいたって真剣に答えた。「いや、決してできない。たとえお前の気に入られたいと思っても、できない。」 — 「今の話はなかったことにしましょう。」と言って男爵は話の間に割って入った。「つい冗談が過ぎまして、とオイレンシュピーゲル^{*20}も申します。先ほどの男があまりお気に召さなかったとおっしゃいますが、私などは何百回となくその話を聞いているので全く退屈なのですぞ。しかし、ここにもう一人ずつものすごい剽軽者がおります。商務顧問官殿、バターつきパンに肉を積み上げるのもそのくらいになさってはいかがですか。今度はあなたの出番です。ひとつ王女ヴェンダの話をお聞かせなさい。」

第七 章

失われた世継ぎの王女ヴェンダの物語^{*21}

ヌーデルフーバーはいかにも俗物らしい調子で始めた。「私は善良で正直なスイス人だし、あなた方は全くもって気のいい方々だ。私はあれこれ考えながらたくさんお話ができますぞ。だがワインを一杯いただかないことには。我々正直なスイス人は我々のワインがないとどうにもならんのです。そうでないと口が乾きますんでな。さてと、王女ヴェンダのお話をするんでしたな。私が商

売物の絵を少しばかり持ってワルシャワの見本市に行った時のことです。戦に強いポーランドの勇士達ポラツケンの入城式^{※22}を皆で待っていました。暑い夏のことでしたが、ポーランド人はコルクでなく粘土の塊で瓶に栓をするもんだから、ビールは全部酸っぱくなっていました。ビールと害虫と礼儀作法に関することを除けば彼らは全く気のいい連中ですよ。さて私は、王女のカジミール様やトリクセーネ様にどうあってもお目にかかるわけにはいかなかったのです。そんなことをしたらお二人とも私を引き留めて放してくださらなかったでしょうからね。こんなことはあちこちの宮廷で経験済みですよ。朝の食事時に伺うと昼まで引き留められて、昼食後に小さな王女様方と長いことお話しした挙句、夕方になれば食事をいただきずには帰してもらえないんです。それで骨折り損でまる一日過ごすわけです。しかし私は毎日きちんと仕事を怠らず、絵にもう一度上塗りをしなければなりませんでした。ところでポーランド人はこれが好きでして、持っている絵の一つ一つに毎日卵の白身を塗るもので、二三年経つとまるで厚いガラスを通して絵を見ているような具合になるんです。それから、私が持ってきたスイス焼酎キルシュグアイストの荷も開けざるを得ませんでした。ポーランドの勇士達を相手にわずかばかりの商売をするには、いつもまず一杯やらないと上手くいかんのです。すると、あの連中ときたら大声を上げて、細かいことなどどうでもよくなってしまふんです。だが、私は決してへべれけにはなりませんぞ。鍛え上げた胃袋を持っていますんでね。

さて、天気は上々で入城式にはもってこいでした。多くの商人達は店を畳んで自分も見物しようとしていたんです。私は見物だけでは腹がくちくならないと思って、飛び切り面白い銅版画の品々を店の前に並べたんです。ところが、いまましい町の尼僧達が、紙に点で描いた、派手な模様の、ぴかぴか光る奴らのいまましい聖人の絵をその日に限ってただで配ったんで、こちらは商売上がったりになったんですよ。」

この言葉を聞くと伯爵夫人は伯爵を見つめながら言った。「ほらね、商務顧

問官様も尼さんの絵なんか大したものじゃないと思っていらっしやるわ。まだ覚えているでしょう。私が聖人の絵に口髭を描いたら、あなたはすごく怒ったわね。どう、これでわかったでしょう。あなたの方が間違っていたのよ。」 — 実に不愉快な記憶というものがある。つまり、思い出したくない時に甦る記憶のことだ。また、愚かな狡猾さというものがある。これも場違いな時に発揮される狡猾さのことだ。伯爵は内心驚き、思い出すのも辛いことを、どうして彼女はこれほど軽率に考えたり思い出させたりできるのかと思った。激しい怒りが彼の口をついて出た。彼はぐっと怒りをこらえて、急いでドアを出ながら言った。「私に構わず話を続けてくれたまえ。すぐには戻らないから。」 — 伯爵夫人はそれには全く答えず、商務顧問官に話を続けてくれるように言った。

「...ええ、尼さん達が描いたのはとてつもなく多彩色の絵でしてね。私の工房などでは上手く真似はできません。また、庶民はそういう絵が好きなんですな。もし閉鎖される尼僧院が一つでもあれば、尼さんを十人ばかり雇い入れて私の仕事をさせますよ。こうしてのらくらと絵の埃を払っていると、橋の上ではでっぴりした供物係司祭の手で一匹の雄羊が屠られました。そして、彼はあれこれ唱えながらその雄羊の心臓を思い切りヴィスワ川の中へ放り投げたのです。すると美しい王女ヴェンダ様が彼に歩み寄って叫びました。『神々はポーランドの勇士達に多大なる恩寵をお示しくださったのですから、屠った家畜や薫香蠟燭をお供えするだけでは、神々への感謝を表わすことはできません。私自身が神々の生贄となり、あらゆる国難を払うことにいたします。』こう言いながら彼女は橋板の先端まで跳びはねて行き、 — 何しろポーランドでは橋に欄干というものがありませんし、橋といっても厚板がつなぎ合わされて水に浮いているだけの代物ですから — 今度は『海が清らかな生贄たる吾を迎えたまわんことを。』と言ってヴィスワ川へ身を投げたのです。 — 皆身動き一つできず、呆然と我を忘れているようでした。私はこれはただの茶番だと思いました。実際そう見えたのです。しかし、大勢の者が続いて飛び込み、彼女を助

けようとしたのです。でも、もはや彼女に追いつくことはできませんでした。私はこいつらは馬鹿者だと思いましたよ。それで、姫はどうなるかとじっと目で追っていたのです。彼女がどこにいるかは、水面でぐるぐる回る白い着物でまだわかっていましたから。美しいお方でしたが、私からはただの一銭もお買い上げくありませんでした。それで私は、あんな女なぞ悪魔にさらわれてしまえばいいと思っていたのです。すると、彼女が流れに押されて鰻網の中に吸い込まれて行くのが見えました。そこで彼女の姿は消えてしまったのです。これであの女もおしまいだなと思いましたよ。 — ところが、他の皆もそうでしたが、これは思い違いだったのです。この鰻網というのは司祭達の持ち物で、とても長いシュレージエン亜麻布の袋でできていたのです。これが教会に運ばれて、捕えられた全ての鰻ともども死んだ姫まで吐き出したのです。そしてその場で主任司祭が救命器具を用いて彼女を蘇生させたわけです。こちらは、そんなことは思いも寄りませんでした。その頃我々は皆が皆、彼女は死んだとばかり思っていましたからね。彼女を助けに泳いで行った多くの者達は溺死するか、あるいは瀕死の状態ですら運ばれるかしたのです。それで、私はその者達を非難して、君子危うきに近寄らずだというのに、こんな急流に飛び込むなんて実に馬鹿げたまねをしたものじゃないか、と言いました。「世の中にはとんでもない馬鹿者どもがいるものだ。姫は自分から溺れたがっているのに、それが何であんた方に係わりがあるんだね。それで何の得になるのかね。」と。 — ところが、一人が馬鹿だと皆が馬鹿になるもので、あの連中は私に腹を立てたのです。痛い目に会うのは御免ですから、一目散に自分の店まで逃げ帰って来ましたよ。すると、驚いたの何のって。店先に並べておいた私のわずかばかりの品物のうち、半分ほどが盗まれていたんです。 — 「泥棒野郎どもめ。」と叫んで、私は自分の髪の毛を数本ばかりむしり取りました。「この国の連中ときたら、死にたがっている女一人を助けるために走ったり泳いだりするかと思えば、人様の絵を勝手に持っていきやがる。誰がただでやるものか。」そんなこん

なで私がかやし涙を流して泣いていると、馬車に乗ったカジミール王女が真青な顔をして通りかかるではありませんか。私の姿を見ると、こう声をかけたのです。あなたは善良でお歳もお歳なのだから、王女のことやけになってはいけません。故国にはあなたの子供がいることを考えてください。私はあなたが心から私の家族に同情してくれたことを決して忘れはしません、とね。 — ええ、馬鹿げて話になりませんとも、溺れた王女に同情するなんて。もし誰か私に絵を返してくれたら、カジミール様が馬車や馬もろともヴィスワ川へ王女を助けに飛び込んだって知ったことではありませんよ。心ではそう思ったものの口には出しませんでした。こう申し上げても悪く取らないでいただきたいのですが、厳しい山の中にいる貧しい正直なスイス人が、一銭の金を稼ぐのにどれほど辛い思いをするか誰もわかりはしないんですから。こうして絶望のあまり両手をよじっていると、有り難いことにすばらしい考えが浮かびました。こうなったら残りの品物を全部倍の値段で売ってやれ。そうすれば損が取り戻せるだろう、とね。それで元気が出ました。実際、すぐに二三人の客がそれだけの金を払うはめになりました。どうして奴らはあれほど馬鹿だったんでしょう。馬鹿な奴らが市場に送り込まれてくるので、商人は代金がもらえるんですよ。いやはや、人間はやはり誰も生きたいわけで、霞を食って生きているわけはありませんからね。そうこうするうちに暗くなってしまったので、品物をしまいました。ひどく腹が空いたもので、夕食時をねらってカジミール王女の城に行き、彼女がかけてくれた慰めの言葉のお礼を言おうとしました。城中が大騒ぎで、王女の控えの間には一人の従僕がいるだけでした。こいつが私にずけずけと、王女はトリクセーネ王女と二人きりになりたいと仰せだ、誰も通すわけにはいかん、とびしゃりと言ったものです。 — 『大したことはありませんよ。』と答えて、私は思わず奴を脇に退けました。『王女はきっと私にお会いくださるし、私の方も王女に用があるんだ。』 — もちろん、私には事実彼女に用があったのです。私は彼女に、胸に短刀を当てた悲しみの聖母^{*23}と、山嵐

のように矢の突き刺さった聖セバスティアーン^{※24}の絵を持って来ていたのです。王女はこの手の絵が好きでしたから、たんまり払ってくれるはずだったのです。さて、驚くなかれ、ポーランド^{ポーランド}の連中はキリストに限らず、異教のサタンでも、ユピテルでも、アポロでも、とにかくそんな類のものは全て崇拝するのです。ポーランド^{ポーランド}の連中にはこれが当たり前なのです。こいつらは何でもごっちゃにして食ってしまうのです。農民の一番の御馳走といえば、燃える獣脂蠟燭を添えたキャベツの塩漬と決まっていますのです。反吐の出そうな食べ物ですよ。ええと、どこまでお話ししましたっけ。 — そういうわけで、王女の部屋に入って行ったのです。中に入ると、王女はいぶかしそうに私に尋ねました。『おや商務顧問官殿、控えの間で誰かに私達が二人きりになりたがっていると云われませんでしたか。』 — 『さしたる用ではありません。』と私は答えました。『この古いぼれなど何も構わず、どうぞ遠慮なく話をお続けください。やはり私の方がたくさん世の中を見てきましたよ。確かに私は今日多くを失ったわけですがね。』 — その時私が自分の絵のことを思って激しく泣くと、涙がぼろぼろと頬を伝って流れ落ちました。 — 王女も一緒に泣き、私を慰めようとしてました。彼女は、ちょうど今トリクセーネ王女に不幸なヴェング姫の秘密の話を聞かせようとしていたところだ、と言いました。 — 私は彼女に、私にとって楽しい話でなくとも、ともかくお話しになるようにと申し上げました。年老いた正直なスイス人の私は、この古ぼけた頭でも十分に考えることがありますからな。何か食べ物を出してくださるおつもりなら、私も都合よく暇つぶしができます。通りすがりに厨房を見たら、ベーコンを差した切れ目入りの美味しそうな仔牛の腿肉がまだ一つありましたね。お茶のせいで腹がぐうぐう鳴るんです。お茶に慣れていない上に、何か混ぜられたら、まずくて飲めたものではありません。せめて私のお茶には卵の黄身を二三個落としてください、とね。彼女は私の好物をもうすっかりご存知で、実際お茶の席から立ち上がると、悲しみの最中だというのに私に向かって慈悲深く微笑む眼差しを投げずに

はいませんでした。しかし、私は続けて言いました。『何で高貴な方々がお茶を召し上がるのか、私にはほとんどわかりませんよ。こんなもの水っぽくて、到底腹の足しにも元気にもならんのに、この節はずいぶんと値が張るんですからな。』彼女が立ち上がると、私は彼女が座っていた繻子織りの小さなソファーに腰を下ろしました。するとトリクセーネ王女が、それでは私達が座れませんわと言ったのです。『心配ご無用。』と私は答えました。『うまく詰められませんから。このスイスの老いぼれは、夕方に少しばかり居眠りをするのが好きなのです。それで、もうこの国に来てからもやってしまいましたが、椅子ごとひっくり返ったことがあるのです。その話をしても、お二人とも驚かれるだけですわ。』 — 王女は犬を何匹か連れて来ました。私が朝に鯨を一匹ポケットに忍ばせていたものですから、その犬ころどもが私に吠えたり臭いを嗅ぎまわったりするの何のって。こいつらの振舞たるや実にひどいものでした。私は王女に聞きましたよ、どうしてこれが我慢できるのですかと。私はこれでも人間ですからこんなことは仮にも考えたくありません、とね。 — すると、やれ有り難や、スープが運び込まれてくるじゃありませんか。君主方の召使いというのは、やはり実に愛すべき人々ですよ。こういうものを運ぶのに、途中で半分平らげたりなどしないのですからね。私ならきっとやっているでしょうな。』

(第二部 第一章～第七章)

注

※ 1 聖ヴェロニカの布

聖ヴェロニカはイェルサレム出身の敬虔な女性。刑場へ引き立てられて行くイエスに、血と汗を拭いてほしいと自分の頭巾を差し出すと、返ってきた布にはイエスの顔型が付いていたと言われている。

※ 2 その柔らかい座り心地は

ナポレオン支配時代のプロイセンで実際にあった出来事を暗示。三年間の不在の後、1809年12月23日にプロイセン王と王妃の厳かな入城式が執り行われた。

※ 3 大勢が御馳走を前に座っていたのだ

ホメーロスの『オデュッセイア』の場面で、妻ペネロペの許へ戻り、彼女に言い寄る男達に祝宴の席で出くわすオデュッセウスを暗示。

※ 4 タンタロス

ギリシア神話におけるゼウスの息子の一人。オリンポスの神々は彼を食卓に招くが、神肴を盗み地上の人間達に食べさせ、神々の秘密も言い触らす。ついには、神々の全知を試すために自分の子供ペロプスを殺し、それを神々の御馳走として供するが、その罪として地獄に落とされる。そこで彼は、顎まで水に没かりながら、飲もうとすると水は退き、頭上には実もたわわに木の枝が垂れ下がっているが、つかもうとすると枝は遠ざかってしまうという、餓えと乾きの永劫の苦しみを受ける。

※ 5 長ズボン

フランス革命時に従来の半ズボンに代わって穿かれるようになった。長ズボンを意味するパンタロンというフランス語は、イタリア語のパンタローネに由来する。パンタローネとはイタリアの民衆劇コメディア・デラルテの道化師役で、仮面を着け赤い長ズボンを穿いている。

※ 6 サンペーヌ

フランス語で「楽々と、たやすく」の意。着心地が楽な部屋着。

※ 7 後光に包まれた黄金のキリスト

『ドローレス伯爵夫人』第一部の扉絵に描かれた指輪の絵（次頁）を参照。

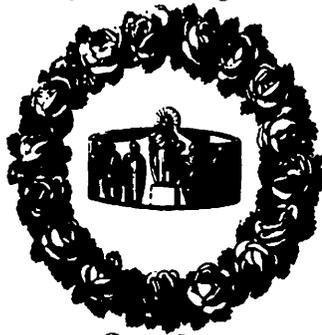
※ 8 ロザリオ

カトリック教会における一種の数珠。カトリックの儀式では、これを手繰りながら主の祈りとアヴェ・マリアが一定回数唱えられる。

Armut Reichthum
Schuld und Buße
der Gräfin Dolores

Eine wahre Geschichte
zur lehrreichen Miterhaltung armer Frauenlein
aufgeschrieben

Ludwig Rheim v. Arnim.



Erster Band
mit Melodien

Berlin
in der Neustadt Buchhandlung.

Verlag von J. F. Schöningh

※9 老従者ループレヒト

精霊の一人。けば立った服を着て、鞭を持ち、袋をかついでクリスマスの前に子供達の前に現れ、鞭で脅したり、贈り物を配ったりする。その姿は、精霊達の移動を仮装によって象徴的に表現したゲルマン時代の冬至祭の風習と結び付いている。

※10 剣を抜くものは

「マタイによる福音書」第26章52節。「ヨハネの黙示録」第13章10節にも類似の表現がある。

※11 青髭

騎士青髭。フランスのおとぎ話中の人物。留守中に秘密の部屋を開けてはいけないという言いつけを破ったとして、六人の妻を次々と殺した。七人目の妻は間一髪のところを三人の兄弟によって救い出される。この話はシャルル・ペローによって初めて印刷されている(1697年)。

※12 クーヘンライター製のピストル

アンドレアスとクリストフ・クーヘンライターは18世紀の有名なレーゲンスブルクの銃工。若き日のアルニム自身クーヘンライター製のピストルを所持していた。

※13 ある深遠な思想家

ドイツの詩人ヘルダーリンのこと。本文原注には、「ヘルダーリン、孤独の懨め、73ページ参照。」とある。引用部分はヘルダーリンの「パトモス賛歌」の最終連を暗示。当該箇所は以下のとおり。

「（．．．）しかし父は愛する、／あらゆるものを統べつつ、／何にもまして、その確固たる文字が／保たれることを、そして存続するものがよく／解釈されることを。これにドイツの歌が続くのだ。」

アルニムは、この詩連が彼によって発行された「孤独の懨め」の巻に掲載されたことを指摘している。ここで言っているのは、彼の「隠者新聞」の1808年にハイデルベルクのモーア&ツィンマー社から刊行された合本版のことである。1808年5月4日発行の10号の73段に、ヘルダーリンのこの賛歌の最終連が「ドイツの詩の成立」という表題で掲載されている。

※14 彼女は家において

この詩にはヨーハン・ライヒャルトが曲を付けている。この詩は初め「家で」という表題で、ジャン・フレデリック・ライヒャルト編「イタリア、フランス、ドイツの吟遊詩人」ベルリン 1805年、30-31ページに印刷された。

※15 忠実なこの目

この詩もライヒャルトの上記詩集の32ページに「家路」という表題で収められている。

- ※16 教皇 . . . の前に出た皇帝ハインリヒ
神聖ローマ帝国皇帝ハインリヒ四世 (1050-1106) は、司教任命権をめぐる争いで教皇
グレゴリウス七世 (1020-1085) に破門され、1076年12月から1077年1月にかけて北
イタリアのカノッサに赴き教皇に赦免を請うた。ここから「カノッサ行き」は屈辱的
な降伏を意味する俚諺となった。
- ※17 ロトが自分の娘達に抱擁されたように
『旧約聖書モーセ第一書』第19章30節-38節参照。
- ※18 ゲスナーの『最初の船乗り』
ザロモン・ゲスナー (1730-1788) はロココ様式の田園詩人、画家および版画家。
『最初の船乗り』は二つの歌章から成る物語で、1762年に刊行された。
- ※19 砲兵隊を最も恐ろしい武器だと思っていたのですから
ナポレオンを暗示。若きナポレオンは砲兵少尉から彼の軍歴を始め、砲兵隊を彼の戦
争の最も威力のある戦闘部隊にしていた。
- ※20 オイレンシュピーゲル
ティル・オイレンシュピーゲルは十四世紀の伝説的ないたずら者で、中世に広く読ま
れた民衆本の主人公。
- ※21 失われた世継ぎの王女ヴェングの物語
この物語は、匿名で出版されたフランスの長編小説『ポーランドの女王ヴェング、優
美なる物語』(ハーグ 1705年) が出典とされている。ヴェングは西暦700年に生存したと
言われる伝説的なポーランドの女王で、ボヘミアの出典(ヴェンツェスライ・ハゲク
『ボヘミア人年代記』、プラハ 1763年)によれば、西暦728年に死んだという。伝説はこ
れを次のように伝えている。
ポーランドの侯爵クラクは首都をクラカウに置いてポーランドを建国
するが、この聡明で人望のある君主の死後に二人の王子クラクとレッ
クスが遺産相続をめぐる争い、レックスはクラクを殺す。民衆はレ
ツクスを追放して王女ヴェングを女王に選ぶと、彼女はその美しさと
徳によりヨーロッパの大勢の君侯から求婚される。なかでも、アレマ
ン族の王リトガルは、結婚の望みが叶わないと知るや武力に訴えてヴ
ェングの愛を得ようとするが、彼女の美しさの虜となった家臣達に服
従を拒まれ、ついには自殺して果てる。一方、和睦の後に首都のクラ
カウに帰ったヴェングも自ら命を絶ってしまう。
アルニムはこの素材をおそらく1808年にツァハリアス・ヴェルナーの戯曲『ヴェング、
サルマート族の女王』から知ったと思われる。

アルニム（山下 剛・林 雄作）

※22 戦に強いポーランドの勇士達の入城式

八世紀にポーランドがゲルマン諸族を打ち破った戦勝の伝説を再現する歴史祭のこと。

※23 胸に短刀を当てた悲しみの聖母

悲しみの聖母（Mater dolorosa）を暗示。本作品に一貫して現れ、主人公ドローレスの人物像の展開と関連する。

※24 聖セバスティアーン

三世紀頃のローマのキリスト教殉教者、聖人。五世紀の聖人伝によれば、セバスティアヌスは皇帝ディオクレティアヌス（240頃-316頃）の近衛隊長だったが、ひそかにキリスト教徒となって獄中の信者を激励したため、皇帝の命令で杭に縛り付けられ矢を射られた。その後奇跡的に蘇生した彼は皇帝の許に赴いてキリスト教迫害の非を責めるが、即座に打ち殺された。

（付記）

本書は、ドイツ・ロマン派の作家ルートヴィヒ・アヒム・フォン・アルニム（Ludwig Achim von Arnim, 1781-1831）の長編小説『ドローレス伯爵夫人の貧と富と罪と贖い』（„Armut, Reichtum, Schuld und Buße der Gräfin Dolores“, 1810年刊）第二部 第一章～第七章の翻訳である。

翻訳にあたっては次の全集版を底本にした。

Achim von Arnim, Sämtliche Romane und Erzählungen, Erster Band. München (Carl Hanser Verlag) 1974.

なお、以下の版も参照した。

Achim von Arnim, Werke in sechs Bänden, Band I. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1989.

翻訳者両名は、十数年来ドイツ・ロマン主義文学について共同研究を行っており、本編の当紀要への発表は昨年に引き続き二度目である。訳出に際して分担を行わず、山下と林が全編にわたって共訳を行ったことは、前回と同様である。

訳者：山下 剛（本学専任講師）・林 雄作（山形大学助教授）